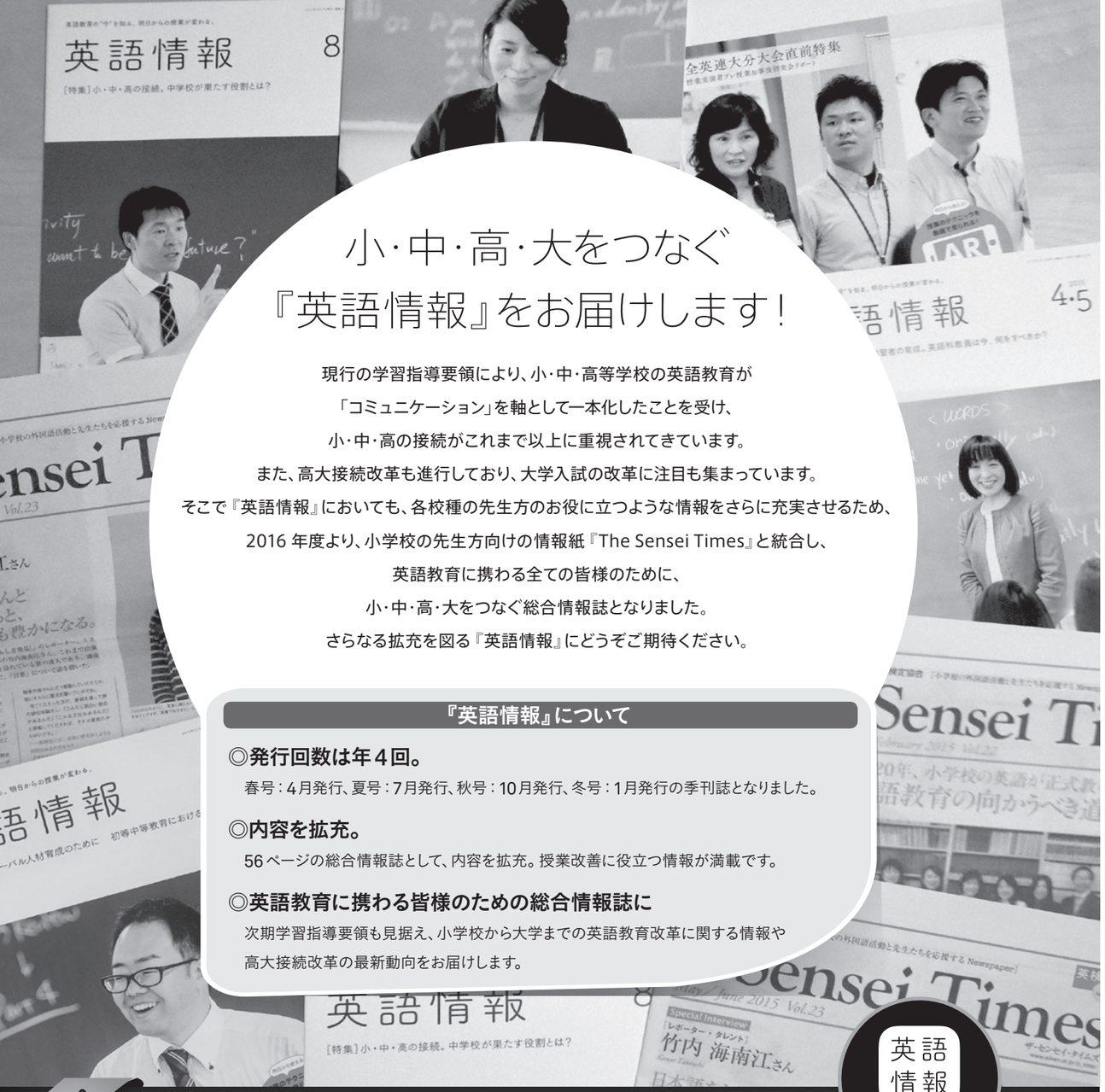
2016年10月1日発行 季刊発行 通巻124号

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

英語情報

2016
秋号
AUTUMN

［特集］言語活動の充実を図る効果的なICTの活用



小・中・高・大をつなぐ『英語情報』をお届けします！

現行の学習指導要領により、小・中・高等学校の英語教育が
「コミュニケーション」を軸として一本化したことを受け、
小・中・高の接続がこれまで以上に重視されてきています。
また、高大接続改革も進行しており、大学入試の改革に注目も集まっています。
そこで『英語情報』においても、各校種の先生方のお役に立つような情報をさらに充実させるため、
2016 年度より、小学校の先生方向けの情報紙『The Sensei Times』と統合し、
英語教育に携わる全ての皆様のために、
小・中・高・大をつなぐ総合情報誌となりました。
さらなる拡充を図る『英語情報』にどうぞご期待ください。

『英語情報』について

◎発行回数は年４回。

春号：4月発行、夏号：7月発行、秋号：10月発行、冬号：1月発行の季刊誌となりました。

◎内容を拡充。

56 ページの総合情報誌として、内容を拡充。授業改善に役立つ情報が満載です。

◎英語教育に携わる皆様のための総合情報誌に

次期学習指導要領も見据え、小学校から大学までの英語教育改革に関する情報や
高大接続改革の最新動向をお届けします。

Information

『英語情報』専用アプリができました！

（無料）
（iOS/Android 対応）

英語情報 AR

スマートフォン&タブレットアプリで AR マークのついた画像をかざすと、
授業に役立つさまざまな動画を見ることができます。

今号の動画は、発行日より3カ月間（予定）ご覧いただけます。

STEP 1 アプリをダウンロード

スマートフォンかタブレットを用意して、AppStore / Google Play で「**英語情報 AR**」と検索し、ダウンロードします。

英語情報 AR ｜ 検索

STEP 2 画像をスキャン

「英語情報 AR」を起動し、AR マークのついた写真が**枠内に収まるようにスキャン**してください。

STEP 3 動画を見る

「**スキャン完了**」と表示されると、動画が始まります。「**スキャン完了**」と表示された動画は「**履歴**」画面より動画を選択すれば誌面から離れても動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad ➡ iOS 7.0 以上、
Android ➡ ver. 4.0 以上。
Android 版は一部対応していない端末がございます。
インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、または LTE 環境を推奨しています。

英語情報

2016 秋号
CONTENTS

02 **最新情報**

02 NEWS & TOPICS

04 **授業改善**

04 特集
言語活動の充実を図る効果的なICTの活用
監修：大阪教育大学 副学長　吉田 晴世

08 特集事例 CLASS REPORT
〔高等学校編〕
AR アクティブ・ラーニングを推進する「フェニックスプロジェクト」でICTを活用
大阪府 大阪府立鳳高等学校　教諭　溝畑 保之

〔中学校編〕
AR ICTは授業を効率よく進めるためのツール。授業は生徒の言語活動を中心に
和歌山県 和歌山市立城東中学校　教諭　須佐 友洋

〔小学校編〕
AR 電子黒板や一人1台のタブレットPCを言語活動に応じて使い分ける
大阪府 大阪教育大学附属池田小学校　教諭　大浦 詩織

14 〔連載〕YUKIの使える CLASSROOM ENGLISH!!! 【第3回】
ハワイ東海インターナショナルカレッジ　准教授　大木 優喜子

AR 15 〔連載〕安河内 哲也先生が聞く【第9回】
明日から使える！英語で授業 7つの鉄則
東京都 麹町学園女子中学校高等学校　教諭　小川 浩正・須賀 幸恵

20 〔連載〕大学入試から変わる日本の英語教育【第3回】
CBT化が進む4 技能試験への対応力をいかに育むか
上智大学 言語教育研究センター長　特別招聘教授　吉田 研作

22 〔連載〕次期学習指導要領に向けて
〔高等学校編〕【第3回】
生徒と教師にとっての体験的学習の重要性
上智大学 外国語学部　教授　和泉 伸一

〔中学校編〕【第3回】
「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み
英語のインタラクションで深める内容理解
文教大学 国際学部・同大学大学院 国際学研究科　教授　阿野 幸一

〔小学校編〕【第3回】
他教科との連携による授業をどのように進めるか
琉球大学 教育学部　教授　大城 賢

28 **英検情報**
(Information) 英検 4技能化への対応
01「使える英語力」を身に付ける4級・5級 スピーキングテスト
02 ライティング導入で2級も4技能試験に

30 〔EVENT REPORT〕
4技能統合型授業への改善を考える3日間
「第4回 全英連・英検協会共催 夏季研修会」を開催

31 **大学入試改革**

31 〔Information〕思考力・判断力・表現力を測定する4技能統合型テストTEAP CBT

32 TEAP Hot News!
第6回 TEAP連絡協議会
TEAPを活用した4技能入試で日本の英語教育の改善を推進！
TEAP 活用事例　第9回：東洋大学

34 **留学**

34 多文化社会のカナダでのびやかに英語と世界を学ぶ
〜在日大使館に聞く、カナダ留学の魅力〜

36 〔連載〕海外進学【第5回】
「精力善用」「自他共栄」の精神を身に付け国際人へ
灘中学校・高等学校　校長　和田 孫博

38 **国際化の取り組み**

38 Super Global High School【第9回】
グローバル・シチズンを目指しさらにグローバル・リーダーへ
筑波大学附属高等学校

40 Top Global University【第9回】
新設・国際教養学部をモデルに未来にヒットする新教育を推進
千葉大学 副学長・理事（教育・国際担当）　渡邉 誠

42 **指導のヒント**

42 〔連載〕思考力・判断力・表現力を育むライティング活動のために【第3回】
清泉女子大学 文学部 英語英文学科　教授　大井 恭子

43 〔連載〕柴原智幸先生のプレゼンテーション講座【第3回】
神田外語大学 外国語学部 英米語学科　専任講師　柴原 智幸

AR 44 〔連載〕MASUMI先生の夢中になれる英語 Game&Activity【第3回】
英語芸術学校MARBLES　主宰　小口 真澄

46 **Pick Up! 英語教育**

46 TSUNAGARIのある英語教育を山口から発信
第66回 全英連山口大会実行委員会メンバー座談会

50 **教員研修**

50 〔EVENT REPORT〕
英語教授法を学び、異文化理解を深める
2016年度 英語教員海外研修をオーストラリアで実施

52 2015年度 英検 英語教員海外研修
帰国後の取り組み報告
●中学校英語教員研修　米国　モンタナ州立大学
島根大学教育学部附属中学校　教諭　鎌田 真由美
●高等学校英語教員研修　英国　ケンブリッジ大学
大分県立中津南高等学校　教諭　山﨑 裕子

54 わたしのオススメ本

News & Topics

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

INFORMATION

全ての教員の皆様へ「英検 検定料助成制度」のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、文部科学省の『英語力向上のための5つの提言』に関する取り組みを全面的に支援し、全ての教員の方々を対象に、実用英語技能検定（英検）を教員特別検定料にて提供いたします。この機会にぜひ、英検を有効にご活用ください。

■助成の対象となる試験

実用英語技能検定（英検）

■対象となる級および教員特別検定料

級	教員特別検定料	定価
1級	4,000円	8,400円
準1級	3,000円	6,900円
2級	2,900円	5,800円
準2級	2,300円	4,500円
3級	1,600円	3,200円
4級	1,300円	2,600円
5級	1,300円	2,500円

■助成の対象となる方

学校教育法第1条に規定された学校のうち、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校に勤務する教員の方。

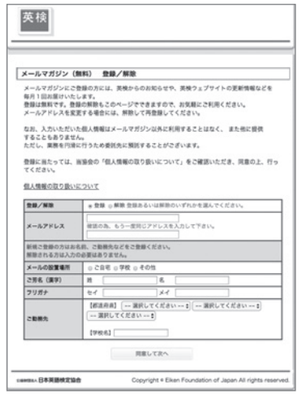
※海外校勤務の方はご利用いただけません。

お申し込み方法などの詳細は英検ウェブサイトをご確認ください。

http://www.eiken.or.jp/eiken/group/teacher/

INFORMATION

「教員向けメールマガジン」を毎月1回配信中！



英検協会では、教員向けメールマガジンを配信しております。メールマガジンにご登録いただいた方には、英検協会からの重要なお知らせをはじめ、英検ウェブサイトの更新情報、各種試験（英検、TEAP、IELTS、BULATS）情報、通信教育、「英ナビ！」等の教育コンテンツ情報を、毎月1回お届けいたします。ご登録は無料です。メールアドレスとお名前、ご勤務先のみをご入力いただくだけで簡単に登録することができます。

なお、すでにご登録いただいている方でメールアドレスを変更する場合には、登録を一度解除してからの再登録が必要となります。

ご登録は、以下よりお願いいたします。

英検　教員向けメールマガジン　検索

https://uketuke.eiken.or.jp/utl/jsp/UTLA0000_Action?MERUMAGA_KBN=2

※なお、登録解除も同じページからできますので、お気軽にご利用ください。

「英検」2016年度第3回検定のご案内

幅広い年代の方々が受験する実用英語技能検定（英検）。第3回検定は11月29日から申込受付を開始します。試験日程などの詳細は、英検ウェブサイトにてご確認ください。

http://www.eiken.or.jp/eiken/schedule/

一次試験

●本会場（公開会場）
2017年1月22日（日）

●準会場（団体受験のみ）
2017年1月21日（土）・22日（日）…全ての団体・学校
2017年1月20日（金）… 中学・高校のみ選択可

二次試験
2017年2月19日（日）

申込受付
11/29㈫～12/20㈫ 協会必着【12/16㈮書店締切】

EVENT

英国の公的な国際文化交流機関ブリティッシュ・カウンシルが主催する「英国留学フェア2016」

イギリスから50校以上の大学・語学学校・カレッジ・ボーディングスクールなどの教育機関の代表者が来日し、ご来場いただいた皆さまの個別相談に応じます。公的機関ならではの公平で正確な情報も充実。英語留学や大学・大学院留学の計画や準備に役立つセミナーを行うほか、奨学金の相談ブース、英語運用能力試験IELTS相談ブースなども設置します。

参加無料
入退場自由

日時：2016年10月22日（土）13:00～18:00

会場：秋葉原UDX GALLERY
（〒101-0021 東京都千代田区外神田4-14-1）

対象：留学に関心がある方ならどなたでも

開催内容：

①**学校ブース**:イギリスの教育機関担当者との個別相談（通訳有）
②**留学準備コーナー**：英国留学体験者との留学相談
③**IELTSコーナー**：英語運用能力試験IELTSについての相談
④**英語コーナー**：British Council 英会話スクールの担当者と相談
⑤**ビザ相談コーナー**：大使館ビザ担当スタッフにビザについての相談
⑥**奨学金ブース**：奨学金に関する個別相談
⑦**企業ブース**：パートナー企業のサービスや特典を紹介

「英国留学フェア2016」特設ウェブサイト：
http://education-uk-fair.jp

ウェブサイトで事前登録された方には、当日会場でプレゼントを差し上げます。抽選でブリティッシュ・エアウェイズの東京ーロンドン間の往復航空券（プレミアム・エコノミークラス）や電子書籍リーダーが当たるキャンペーンも実施中です。

EVENT

カナダへの留学希望者向けカナダ大使館主催「カナダ留学フェア2016秋」を開催

日時：【東京】11月2日（火）17:00～19:30
11月3日（祝）11:00～17:00
【大阪】11月5日（土）11:00～17:00

参加無料
入退場自由

会場：【東京】カナダ大使館
（〒107-8503 東京都港区赤坂7-3-38）
【大阪】梅田センタービル16階
（〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西2-4-12）

詳細は、www.canada-ryugaku-fair.com にて随時更新。

INFORMATION

第66回 全英連山口大会参加者募集中！

全国英語教育研究団体連合会（全英連）は、11月11日、12日に山口県山口市で開催される「第66回全国英語教育研究大会（全英連山口大会）」の参加者を現在、募集しています。

大会コンセプト：TSUNAGARI

第1日◆11月11日（金）
会場：山口市民会館大ホール
〒753-0074　山口県山口市中央2-5-1
JR「山口」駅下車徒歩約15分、またはJR「山口」駅よりバス「中国電力前」まで約30分乗車後、徒歩約3分。

9:30 ～ 10:00　受付
10:00 ～ 10:45　総会
10:55 ～ 12:25　記念講演
演題　「"TSUNAGARI" through Backward Design」
講師　関西外国語大学 教授　中嶋 洋一氏
12:25 ～ 13:55　昼食・業者展示
13:55 ～ 14:40　小学校授業ビデオ発表（45分）
発表者　光市立室積小学校 教諭　山田 浩史氏
指導助言者　広島大学 准教授　兼重 昇氏
15:00 ～ 15:55　中学校授業説明　中学校授業実演（50分）
授業実演者　周南市立住吉中学校 教諭　野坂 良太氏
指導助言者　徳山工業高等専門学校 教授　吉留 文男氏
16:15 ～ 17:10　高等学校授業説明　高等学校授業実演（50分）
授業実演者　山口県立山口高等学校 教諭　冨山 貴之氏
指導助言者　山口大学 教授　高橋 俊章氏
18:30 ～ 20:30　懇親会
（会場：セントコア山口 2階 サファイア）

第2日◆11月12日（土）
会場：山口学芸大学・山口芸術短期大学
〒754-0032　山口県山口市小郡みらい町1-7-1
JR「上郷」駅下車徒歩約8分

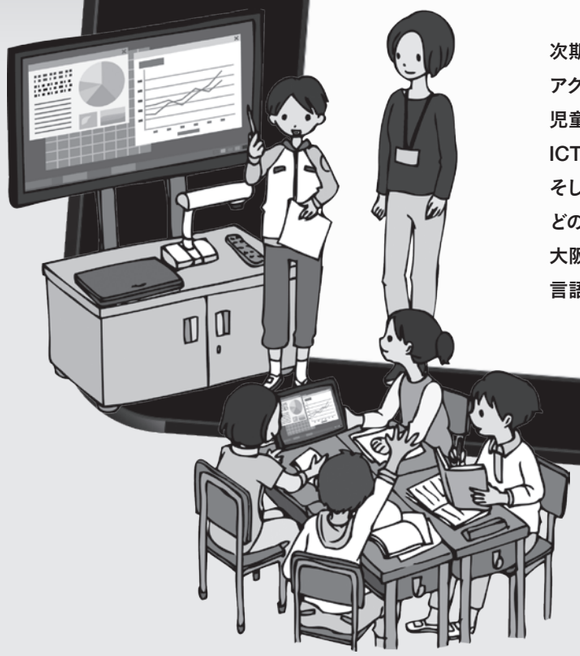
9:00 ～　9:30　受付
9:30 ～ 11:00　分科会 第1部
11:20 ～ 12:50　分科会 第2部
※分科会発表の詳細は、全英連ホームページにてご確認ください。

詳しくは

第66回　全英連山口大会　検索

https://conv.toptour.co.jp/2016/yamaguchienglish2016/

※全英連山口大会直前特集記事をP.46～49に掲載しています。



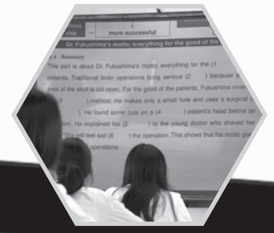
特集「授業改善を考える」

言語活動の充実を図る効果的なICTの活用

アイ・シー・ティー

和歌山市立城東中学校
(P.10〜11)

大阪教育大学附属池田小学校
(P.12〜13)



大阪府立鳳高等学校
(P.08〜09)

次期学習指導要領改訂に向けて、情報教育の充実やアクティブ・ラーニングにおけるICTの活用が議論されている。児童生徒が主体の言語活動中心の英語の授業では、ICTをいかに活用すればよいのか。そして、児童生徒の「思考力・判断力・表現力等」を育むためにはどのような学習形態が必要なのか。大阪教育大学副学長の吉田晴世教授とともに、言語活動の充実を図る効果的な活用方法について考える。

●監修：吉田 晴世（よしだ・はるよ）

大阪教育大学副学長、教育学部英語教育講座教授。CIEC（コンピュータ利用教育学会）副会長・外国語教育研究部会世話人。米国カンザス大学大学院修了（MEd）、神戸大学大学院国際文化研究科修了（Ph.D.）、摂南大学助教授を経て2003年より大阪教育大学教授。2016年より同大副学長、附属図書館長。専門分野はICTによる英語教育、言語教育科学・心理言語学、外国語教育。主な著書に『最新ICTを活用した私の外国語授業』（編著：丸善プラネット）など。

ICTはアクティブ・ラーニングを支えるツール

ICT（Information and Communication Technology）とは、情報・通信に関連する技術一般の総称です。ほぼ同じ意味を表す言葉としてIT（Information Technology）がありますが、ICTはITの「情報」に加えて、「コミュニケーション性」を強調しているところに特徴があります。このICTの発達に伴い、英語教育における活用の研究が盛んに行われるようになってきました。

私がまずお伝えしたいのは、ICTはあくまで、「学習を支えるツール」にすぎないということです。ICTというと、パソコンやスマートフォン、タブレットPCをイメージする方が多いと思います。しかし、教室の中にはそれ以外にもICTが存在しているのです。みなさんおなじみのOHPやプロジェクター、DVDプレーヤーでさえもICTと言えるのです。近年では、電子黒板や書画カメラなどが普通教室に整備され、デジタル教科書やデジタル教材も使われるようになってきました。このような機器を使って、児童生徒たちに「どのように情報を収集させ、発信させるか」ということを考える必要があります。デジタルネイティブと称される現代の児童生徒たちは、生まれながらにデジタル機器が身の回りにあるため、スマートフォンやタブレットPCなどは違和感なく、直感的に操作することができてしまいます。だからこそ、そのような機器を授業でも活用して、生徒の「思考力・判断力・表現力等」を伸ばしてほしいと、文部科学省では重視しているのです。

しかし、ICTが学習の中心になるということではありません。次期学習指導要領改訂に向けて、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び、いわゆる「アクティブ・ラーニング」によって「思考力・判断力・表現力等」を育むことが議論されているなか、そのような学習を支えるツールとしてICTの活用が求められているのです。

デジタル教材を活用した授業の良さ

小学校では昨年度より、『Hi, friends!』のデジタル教材を文部科学省の研究開発学校などに配布して活用し、小学校の英語教科化や中学年における外国語活動の導入に向けた新たな外国語教育の検証を行っています。導入当初は、私も教員研修でデジタル教材などのワークショップなどを行いましたが、現在では小学校の先生方もそれらの使い方にも慣れ、授業で使用する教材を自分で作るなどして、工夫されるようになっています。

中学校でも、検定教科書のデジタル教科書が用意されているため、学校単位で購入して活用しているところも増えてきました。音読をする際に本文を電子黒板に写し出し、文法事項を説明したり、重要なポイントを示したりすることで、生徒も今、どこを読んでいるのか、何がポイントなのかが分かりやすくなるという利点があります。従来のように各自が教科書を手に音読をしたり、板書を書き写したりという授業では、生徒の目線が教科書やノートなど下を向きますが、デジタル教科書を使えば、生徒全員が電子黒板に目を向けるようになります。先生にとっては、生徒がどこでつまずいているのかを把握しやすくなり、生徒も何を学んでいるのかが分かりやすいのも利点だといえるでしょう。

学習内容が定着し、効率良く学べる

高等学校では、さらに学習の内容が高度になり、社会的話題や国際的問題をテーマにした課題解決学習に取り組みながら、言語活動を深めることができるでしょう。例えば、都知事選、参議院選挙、選挙権年齢の引き下げ、オリンピックなどを題材に、グループでディスカッションをしたり、調べたりしたことを発表するといった活動ができます。そして、クラスや校内での発表にとどまらず、インターネットを通じて、海外の姉妹校などの生徒と共通のテーマについて意見交換し合うこともできるでしょう。それにより、異文化理解を促し、課題解決能力を育むことができます。さらに、学習内容を深めるには、他教科との連携も必要です。他教科で得た知識、学んだ内容について、英語でも考え、表現してみてもよいでしょう。これは、国際バカロレアの考えに合致しており、ICTは学びを支えるツールとして当然あるべきものとして捉えられています。

このようなアクティブ・ラーニングを取り入れ、グループワークを行う際には、まず生徒の思考を活性化することが何より重要です。もちろん、ICTなしでも活動は成立します。では、ICTを活用することの利点とは何でしょうか。それはつまり、効率良く学ぶことができるということなのです。

ある実験で、1つ目は耳から聞いたことを理解する、2つ目は文字や絵など目で見たことを理解する、そして3つ目は見たり聞いたりしたことで理解するという3つの理解の仕方でグループに分けて調査したところ、3日後に内容の記憶が残っていた割合は、音だけの理解は10%程度で、映像だけの理解は20%でしたが、音と映像の両方による理解では60〜70%も残っていたのです。つまり、英語学習においても、ただ音だけ、文字だけで理解させるよりも、ICTを用いて音や文字、映像を上手に取り入れることで、生徒に学習内容を定着させ、効率よく学ばせることができるのです。

デジタルとアナログを目的に応じて使い分ける

ICTをどのように授業に取り入れればよいのか、それは教師の工夫次第です。ICTの活用は決して敷居の高いものではありません。授業の導入で歌を流す、自作のフラッシュカードを使って新出単語を示す、ということもできます。また、デジタル教科書を電子黒板に映し出して、本文に線を引いたり、拡大表示したりして、理解を促すこともできます。実物を見せることが難しかったものを写真や映像などで見せることも可能です。児童生徒が一人1台、もしくはグループで1台のタブレットPCを使うことのできる環境が整っているのなら、プレゼンテーションの準備のために写真機能を使って校内外で撮影させた写真を共有したり、各自の調べた内容を手書きやタッチペンで入力して電子黒板に転送させて表示したりするという使い方もできます。ICTは個々の力を伸ばすことも、グループでの協働学習で活用することもできるので、学習の目的に応じた使い方をすればよいと思います。

もちろん、授業の全てをICTによるデジタル化すればよいというものではありません。音声や映像をデジタルで示して、会話練習やディベート、ディスカッションなどの活動はアナログで、コミュニケーション能力を育むというそれぞれの良さを生かした使い分けをしていけばよいと思います。

ICT を活用した指導法

①一斉学習

挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して**分かりやすく**説明することにより、子供たちの**興味・関心を高める**ことが可能となる。

②個別学習

デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、**自分に合った進度**で学習することが容易となる。

③協働学習

タブレット PC や電子黒板等を活用し、教室内の授業や**他地域・海外の学校との交流学習**において子供同士による**意見交換、発表**などお互いを高めあう学びが可能となる。

文部科学省「学びのイノベーション事業実証研究報告書」より

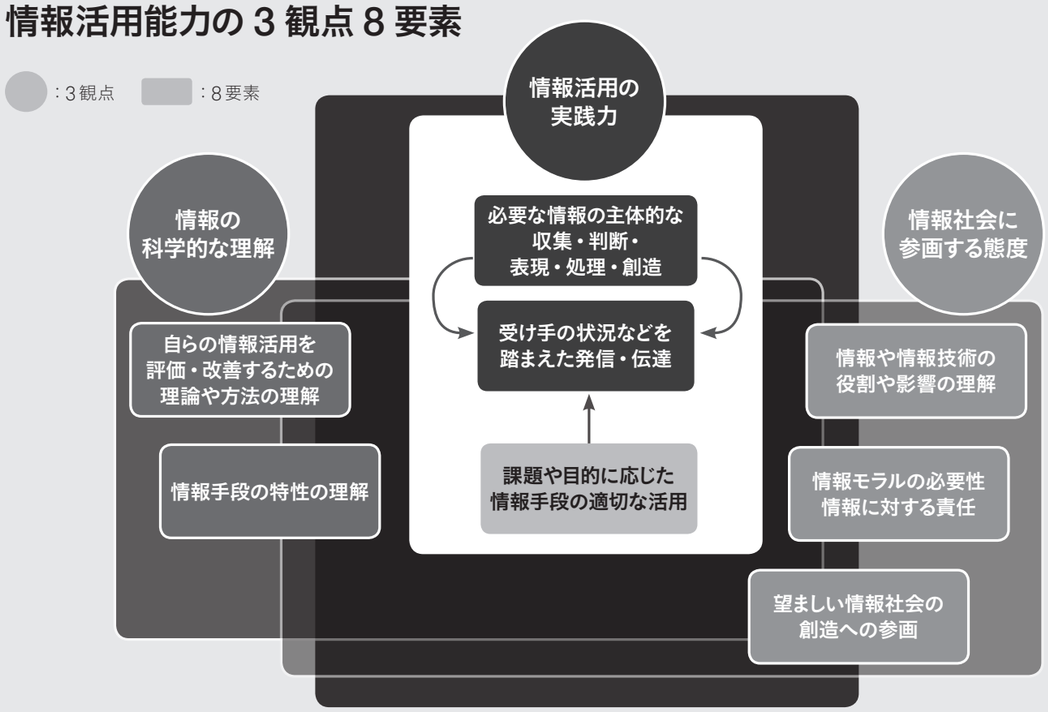
情報活用能力を育む授業づくりを

最後に、授業でICTを活用するうえで気を付けたいのは、情報モラルの問題です。児童生徒がインターネットで検索して、調べた内容をまとめたり、画像や映像を借用したりする際には、著作権についても児童生徒に理解させる必要があるでしょう。また、最近はSNSが児童生徒の間でもよく使われますから、個人を攻撃するような書き込みをしないこと、個人情報の公開制限をすることなど、セキュリティの面での指導を行うことも大切です。現代は、膨大な情報があふれるネット社会です。児童生徒も日々、多くの情報に触れています。だからこそ、英語科だけに限らず各教科において、児童生徒が情報および情報手段を主体的に選択し、適切に活用する「情報活用能力」を育んでいくことが求められています。

情報活用能力とは

情報活用能力とは、情報および情報手段を主体的に選択し、活用していくための個人の基礎的資質で、次の3観点に整理されています。

情報活用能力の 3 観点 8 要素



文部科学省『21世紀を生き抜く児童生徒の情報活用能力育成のために』（2015年3月）より

情報活用能力は、知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるものです。文部科学省では、情報活用能力を「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3観点から8つの要素に整理し、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、発信・伝達できる能力等を育むことが必要だとしています。

こうした情報活用能力は、アクティブ・ラーニングのような授業形態によって育むことができます。これまで、授業は「一斉学習」が中心に行われてきました。しかし、ICTの活用により、新しい授業形態、新しい学習形態が生まれたのです。児童生徒各自がタブレットPCでデジタル・コンテンツなどを用いて調べ学習（個別学習）を行い、学んだことや分かったことを互いに教え合い、学び合う協働学習が取り入れられるようになりました。そして、教師は児童生徒の個別学習や協働学習の状況を把握し、個々への指導ができるようになりました。アクティブ・ラーニングやICTが一斉学習を廃止し、個別学習や協働学習へ切り替わるということではありません。今、教師には「一斉学習」「個別学習」「協働学習」をどのように組み合わせ、どのような授業をつくっていくのかが問われています。

CLASS REPORT

学校訪問　高等学校編

大阪府立鳳高等学校
溝畑 保之 先生

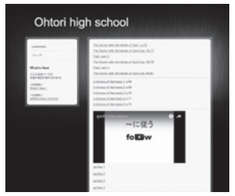
アクティブ・ラーニングを推進する「フェニックスプロジェクト」でICTを活用

大阪府立鳳高等学校は2015年度から、21世紀の知識基盤社会に対応する能力を育むことを主眼として、「アクティブ・ラーニング」による協働学習と英語4技能の伸長を目指し、「フェニックスプロジェクト」に取り組んでいる。このプロジェクトでは、クラウド型の個別学習・ワークシートによる一斉学習・さまざまな協働学習を連携・連動させるために、ICTの活用が不可欠だ。1年生を担当する溝畑保之先生の授業を訪ねた。

ICTが授業と家庭学習をつなぐ

「フェニックスプロジェクト」がめざすのは、ICTを活用したアクティブ・ラーニングによる4技能統合型の授業の成立だ。各教室には教員がpreziというプレゼンテーションソフトを使って作成したワークシートを投影するプロジェクターが配備され、授業はワークシートを使って生徒の思考力・判断力・表現力を育む4技能統合型で行われ、学年を受け持つ教員たちが教材を共有している。2016年度は、1年生を受け持つ5名の英語科教員がチームとなり、3年間の到達目標を示したCAN-DOリストに基づく授業を進めている。

「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業を行うにあたり、同校では、ICEモデルを採用した。これは、Ideas（アイデア：記憶、理解）、Connections（つながり：応用、分析）、Extensions（拡張：評価、創造）を3つの段階としたものだ。Ideasでは、英文を繰り返し読み、タイトル選択、語彙練習、概念地図、サマリー作成といった異なるタスクをこなす。Connectionsは対訳シートを用いて、内容の定着活動とペアでのQ&A活動により英語使用を促し、概念地図を見ながらサマリーを述べるスピーキングテストも実施している。Extensionsでは知識構成型のジグソー法を取り入れた協働学習で、与えられた課題に対して生徒が知識・情報を持ち寄り、グループ討議を通じて自らの答えを導き、プレゼンテーションに取り組む。こうした学びを円滑に進めるためのツールとして、ICTは不可欠であり、教科書本文の題材に関連する動画や音読のモデル音声を流したり、ワークシートを投影したり、指示や説明を明確に示したりといった活用がなされている。



また、教員が自作した教科書本文のパートごとのフラッシュカードや、教科書のモデル音声などをクラウド（tentakaku.jimdo.com）に載せており、生徒はインターネット環境があれば、いつでも、どこでもスマートフォンを使って学習を進めることができる。語彙の定着や音読の練習などは、生徒各自が家庭学習などで進めることにより、授業はプロダクティブな言語活動に、より多くの時間を割けるようになった。

「黒板とチョークによる授業でよかった時代はもう終わりました」と語る溝畑先生は「これからはICTを効果的に活用して、生徒の想像力を引き出しながら、4技能を統合した活動によって思考を深めていく授業を進めていくことが求められます。このようなアクティブ・ラーニングを取り入れることで、生徒の学びの幅は広がります。大学入試に不利になることはありませんし、21世紀の知識基盤型社会に対応する能力が育まれていきます」と、ICTの活用を推奨する。鳳高等学校では、「フェニックスプロジェクト」を通じて、大阪府内はもちろん全国の高等学校のパイロット的役割を果たすことをめざしている。

授業の流れ（1時間目）

溝畑先生の授業の様子はこちら

1 導入〜タイトル選択と語彙練習

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
（アプリの詳細は表紙の裏面へ）

このレッスンでは脳神経外科医の福島孝徳氏について学ぶ。まずPart 1の復習として、福島氏に密着したドキュメンタリー番組を視聴した後、福島医師の異名 “the Samurai Doctor” “Black Jack” “the Last Hope” などをペアで確認し合った。本時Part 2の内容理解に移ると、溝畑先生が本文を音読し、生徒たちは教科書を目で追った。そして、ワークシートを使って、タスク1「タイトル選択」で、内容に合うタイトルを選んだ。続いて、タスク2「語彙練習」では、5つの単語の意味と定義付けに取り組んだ。

2 概念地図での理解

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

ワークシートの概念地図を用いて、内容理解を進める。キーワード部分が空欄になっており、溝畑先生が教科書本文を音読するのを聞きながら、生徒たちは空欄に語句を埋めていく。そして、分からなかった箇所をペアで確認しながら、答え合わせをする。黒板にはワークシートの概念地図が投影され、溝畑先生の解説に合わせて、1つずつ正解が現れる。生徒たちは黒板を見ながら、正解か否かを確認していた。

3 音読練習

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

英文と対訳が記された対訳シートを使って、音読する。溝畑先生が重要語句の解説をし、生徒たちが発音した後、日本語を見ずに英語のまま内容をイメージして音読するよう、指示される。続いて、ペアで節で区切って読み合う。さらに、一方の生徒がシートを見ずに英文を読み、もう一方の生徒が正しく読めているかを確認する。最後に、モデル音声と同じ1分17秒で読めるように音読練習をしてくることが指示された。

授業の流れ（2時間目）

4 同時読みからペア音読穴埋めテスト

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

Part 2を扱う2時間目にあたるこの授業では、まず音声を聞きながらスピードに遅れないように同時読みをする。続いて、ペアで本文内容の小テストをする。AとBのシートは空欄箇所が異なっており、一方の生徒がシートの穴埋めをしながら音読する。もう一方の生徒は、正しい語句を入れて読めているかを確認する。制限時間内に終える必要がある。一方が終わると、交代して同様にテストをする。

5 ペアでの Q&A 活動

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

溝畑先生はQ&Aに含まれる重要語句を解説し、相手の応答へのリアクションの表現も紹介した。生徒は黙読でAとBのシートにある異なるQ&Aの理解を行った。各自がQの英文をシートから目を離して言う練習を終えた後に、交互に質問をし合う。ペアでの英問英答を終了すると先生に知らせる。すると、先生が近寄り口頭で質問を1つ行った。その後、解答が配布され、生徒は自分のシートにないQ&Aを書き記してシートを完成した。

生徒にインタビュー

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

英語の授業を受けての感想やICTを使った家庭学習の進め方、将来の夢などについて聞いた。

CLASS REPORT

学校訪問　中学校編

和歌山県 和歌山市立城東中学校
須佐 友洋 先生

ICTは授業を効率よく進めるためのツール。授業は生徒の言語活動を中心に

2013年度より文部科学省の「学びのイノベーション事業」実証校として、全教科でICTの活用による「わかる授業」の実践に取り組んできた和歌山市立城東中学校。全教室に電子黒板とパソコンを設置し、和歌山市教育情報ネットワークセンターで整備したクラウド型学習ツールやドリル教材等のクラウド型サービスを活用できる環境が整っている。今年度から同校に着任し、ICTを活用しながら生徒の思考力・判断力・表現力を高める指導に取り組む須佐友洋先生の授業を取材した。

生徒の思考力・判断力・表現力を高める指導を大切に

英語科の須佐友洋先生

城東中学校の英語教員は2名で、須佐先生は1年生全3クラスと3年生1クラスを、もう1名の先生が2年生全3クラスと3年生2クラスを担当している。須佐先生は1年生に対しては、小学校で英語に慣れ親しんできた生徒たちの英語への興味を深めるきっかけをつくりたいと考え、3年生に対しては、単に高校入試のための指導でなく、生徒の発話力を意識した4技能をバランスよく身に付ける指導を心掛けているという。また、和歌山市内の中学校3年生全員が公費補助によって実用英語技能検定（英検）を受験することもあり、「スピーキング力を高め、二次試験にもつなげたい」と話す。

現在、和歌山市内の中学校は全18校で「学びの共同体」の実証研究に取り組んでおり、城東中学校も今年度から全教科で実践している。これは、グループで考え、話し合う授業を通じて、教員も生徒もともに学び合う取り組みだ。教室の机を「コ」の字形に並べ、ペアまたは4人グループで話し合いながら考えをまとめていく。英語の授業では、グループワークの際に、4人が机を向かい合わせにするのではなく、2人が向かい合わせに、2人は前を向いて着席する。須佐先生は「生徒たちが授業中、指示や英語を理解できなかったとき、グループの友達に教えてもらいやすいようにと、この形で着席させています」と述べた。授業についていけず何もしない生徒を出さない工夫だ。

文部科学省のフューチャースクール実証校であった同校では、全教室に電子黒板とパソコン、書画カメラが設置されているほか、生徒用に1人一台のタブレットPCも配備されている。須佐先生は、デジタル教科書を新出単語の指導や音読指導で活用し、その効果の高さを感じている。取材に訪れた日は新出単語をデジタル教科書のフラッシュカードで学んでいたが、次の授業では本文の内容理解の際に、ピクチャーカードを表示しながら教科書本文を音声でまず聞かせ、その後に教科書本文を画面に表示し、重要なポイントにタッチペンで赤線を引いたり、文中の単語や熟語などを空欄にして、考えながら音読をさせたりする。さらに、歌や映画などを流して生徒の英語への興味を引き出したり、本文に関連する映像をYouTubeで見せたりもしている。今後はグループに1台のタブレットPCも活用し、調べ学習やプレゼンテーション資料の作成などにも取り組ませたいという。

須佐先生は「ICTを活用することで、板書が必要なくなり、その分、生徒の様子に目を配れるようになりました。ICTは授業を効率よく進め、理解を促すためのツールです。授業全てをICTで進めようとは思いません。あくまでも授業は生徒の言語活動中心で、生徒が思考力・判断力・表現力をつける協働学習の場でありたいものです」と話す。そして、授業で大切にしたいのは、言葉を使う状況や場面設定をしたうえで、それに応じた話し方ができるように、「生徒が考えて発話すること」だと強調する。さらに「生徒には世界のどこでも、どのような状況でも生きていくことのできる人になってほしいですね。一度は世界へ出て、多様な価値観を持つ人々と出会い、視野を広げたうえで、活躍の場を自分で選んでいってほしいと思います」と願いを語った。

授業の流れ

須佐先生の授業の様子はこちら

1 導入

“Stand up.” “Raise your hands.” “Put your hands down.” 須佐先生の指示に合わせて、生徒たちが動く。一連の動作を終えると、須佐先生は電子黒板にそれらの英文を映し、生徒たちに共通点を考えさせた。「動詞で文が始まる」との答えを受けて、再び生徒たちに動詞がどれかを考えさせる須佐先生。Stand、Raise、Put…という答えに対して「指示を表す文は動詞で始まる」と示した。続いて、画面には“Let’s go to the door.” “Let’s open the door.” “Let’s close the door.”の文が表示された。動作で表現するように一人の生徒に促し、最初の文との違いを考えさせた。そして、①指示、②提案の2つの表現を学ぶというねらいを伝えた。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
（アプリの詳細は表紙の裏面へ）

2 グループワーク

4人一組でグループを組み、協力し合って8つの文をワークシートに書き写す。グループの2人が文を覚えて残りの2人に伝えて書いてもらう活動だ。1分が経過したら、役割を交代して同様に活動する。① Be quiet. ②Stop the car. ③Use this umbrella. ④Call the police. ⑤Let’s sing a karaoke. ⑥Let’s go home. ⑦Let’s help him. ⑧Let’s have dinner. 伝達役の生徒は、どうしたら文を正しく書き取ることができるかを考えながら伝えていた。1文字ずつ伝える生徒もいれば、単語ごとに覚えて伝える生徒もいる。その後、それぞれの文が使われる状況を、画面のイラストからイメージし、文と照らし合わせて確認した。さらに、8つの文の共通点を探し、①〜④は指示文であり、⑤〜⑧が提案文であることを理解した。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

3 アクティビティ

各グループに封筒が配られる。封筒の中には8つの文が書かれた紙と小さな封筒が入っていた。生徒たちは8つの文を机上に並べ、須佐先生が読み上げた文をカルタのように取る。すると、須佐先生は指示や提案をするには状況が大事だと生徒たちに示した。そして、小さな封筒から、A〜Hまで8つの状況を説明する文が書かれた紙を出させ、グループで最初の8つの文とマッチングする活動に移った。例えばAの“I don’t like long driving. I feel bad.”の文は、②のStop the car. とマッチするように、状況をイメージし、どのような場面で①〜⑧の文を使えばよいのかを考える活動だ。さらに、①〜⑧の文の状況に応じた伝え方を考えて口頭で表現する。「赤ちゃんが寝ています」と須佐先生が言うと、生徒たちは小さめの声で“Be quiet.”と表現していた。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

4 新出単語

教科書を使って新出単語を復習する。この日の授業で覚えた英文で使われた単語も含まれている。デジタル教科書の「フラッシュカード」機能を使って、単語の発音とスペル、意味を確認した。フラッシュカード機能は、単語を表示したり読み上げたりするスピードや順番を自由に選択することができる。まずは、英語〜日本語と表示されて、発音が流れる。その音声に従うように、生徒たちは続いて発音する。次に、音と意味はなしで、画面に表示された英語を見ながら発音した。さらに、単語がランダムに表示され、その単語を見ながら発音した。須佐先生は生徒たちに何度も繰り返し発音させることで、単語の定着を図っていた。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

生徒にインタビュー

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

ICTを活用した授業について感じていることや、英語を学んで、将来どのようなことをしてみたいかなどについて聞いた。

CLASS REPORT

学校訪問　小学校編

大阪教育大学附属池田小学校
大浦 詩織 先生

電子黒板や一人1台のタブレットPCを言語活動に応じて使い分ける

大阪教育大学附属池田小学校では、3年生から外国語活動を行い、英語専科教員とALTのティームティーチングで授業を行っている。2016年2月から「ICTを活用した英語教育及びクラウド活用に関する産学共同実証事業」がスタート。現在、児童一人1台のタブレットPCを用いた学習効果を検証中だ。4年生のフォニックスの授業を訪ね、英語専科教員の大浦詩織先生による指導の様子を取材した。

フォニックスを取り入れ、音と文字のつながりを丁寧に教える

「児童の心が動く、ワクワクする授業をつくりたい」と話す英語専科教員の大浦先生。タブレットPCを使って授業を行うことで、児童の学習意欲が高まり、学習内容が定着していると手応えを感じているという。同校では3年生で週1回、『Hi, friends! 1』による授業、4年生は週1回の『Hi, friends! 2』による授業と週1回のフォニックスの授業、5年生は週1回の学校オリジナル教材による授業と週1回のフォニックスの授業、6年生は週1回の学校オリジナル教材による授業を行っている。4、5年生のフォニックスの授業が産学共同実証事業にあたる。この事業は、2020年度からの小学校での英語教科化に向けた、4技能の指導法の確立を目指す取り組みだ。大阪教育大学と株式会社東芝、株式会社増進堂・受験研究社が共同し、現在、同校にて実証研究を行っている。

英語専科教員の大浦 詩織先生

フォニックスの授業では、受験研究社の英語教材をデジタル化した教材を、児童一人一人に貸与されるタブレットPCを使って学習する。デジタル教材は、大阪教育大学の吉田晴世教授が監修した。英語を耳で聴きながら、絵や文字と結び付けて視覚化したり、児童各自が発音して録音し、振り返り学習を行ったりすることで、「楽しく学べる」ことを目指した教材だ。また、教材を「クラウド型」で児童に提供することによって、インターネットを通して時間や場所を選ばずに学習に取り組むことができる環境を整えた。

4年生は3クラスあるが、レッスンごとにタブレットPCを使用して教えるクラスと使用せずにテキストのみで教えるクラスに分けて、学習効果を検証している。取材で訪れた4年東組は、最初にテキストで学んでおり、タブレットPCを使用した授業としてはまだ2回目だった。大浦先生によると、4月に授業を始めてわずか3カ月間だが、タブレットPCを使って授業を行った他の2クラスでは、児童が意欲的に学んでいたという。「児童たちは目で見て、耳で聞いて、画面をタッチして、いろいろな感覚を使って英語を吸収しています。英語が得意な児童が苦手な児童に、タブレットPCの操作が得意な児童が苦手な児童にと教え合い、生き生きと学ぶ姿が見受けられます」

ALTのロジャース・チャールズ先生

指導にあたっては、「音と文字のつながりを丁寧に教える」ことを意識しているという。黒板にはその日に学ぶ文字が記され、電子黒板にはその文字を使ったイラストが表示される。イラストをタッチすると音声が流れ、ロジャース・チャールズ先生の発音に続いて、児童も発音する。さらに、児童一人1台のタブレットPCで個別に発音練習をしたのち、児童はペアで問題を出し合いながらタッチペンで文字を書き、4技能を統合して学ぶ。

大浦先生は「現在はフォニックスの学習にタブレットPCを使っていますが、以前に取り組ませたプレゼンテーションやスピーチなど、児童の主体性と協働する力を伸ばすような活動にも活用したいですね。また、他教科とも連携して調べ学習をしたり、チャールズ先生に出身国であるアメリカの文化のお話をしていただいて異文化理解につながる学習をしたり、学びを広げていきたいと思います。単に英語を教えるだけでなく、英語を通じて、自分や友達について深く理解し合える授業をつくっていきたいです」と話した。

授業の流れ

大浦先生の授業の様子はこちら

1 導入

ant, bat, cat, dog, egg, fan…と、アルファベット26文字を表すイラストが電子黒板に表示された。大浦先生は児童に「誰か一人が前に来て、画面のイラストをタッチするように」と英語で指示を出す。軽快な音楽が流れ、"a（エイ）, a, a, ant（ア・ア・アント）"と単語の発音が聞こえてきた。その音声がどのイラストに当てはまるのかを考えて児童は画面をタッチし、他の児童たちは一斉に発音する。zまで全ての音を同様に確認した。続いて「今日はスペシャルゲストがいます。誰の声かを想像しながら聞いてください」と大浦先生が指示すると、児童たちはにっこり。担任の先生の声が録音されていたのだ。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
（アプリの詳細は表紙の裏面へ）

2 bとpの音を理解する

この日のゴールが示される。Lesson13「似ている音を聞き分ける」にあたる授業で、「b（ブ）とp（プ）の音を理解しよう」と大浦先生が黒板に書いた文字を指しながら説明した。黒板には、b for bag, b for bear, b for butterfly / p for pen, p for piano / p for pencilと各文字3つの単語が書かれている。まずは、チャールズ先生がbとpの音をビビビビー、ブブブブ、ピピピピー、ププププというように発音して、児童に繰り返すよう指示する。次に、b, b, b, bag（ババババッグ）とリズミカルに6つの単語を電子黒板の画面のイラストを指しながら発音し、児童がそれに続いた。一通り発音すると、今度は各自がタブレットPCを起動し、チャールズ先生が言った単語を聞いて、自分の画面のイラストをタッチする活動をした。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

3 文字を理解する

音をイラストと結び付けて理解できるようになると、次は文字の理解に移る。黒板の文字を指しながら、チャールズ先生がb for bagと発音し、音と文字を結び付けるのだ。そして、チャンツが流れ、何と言っているかを児童たちは注意深く聴いていた。大浦先生が児童たちに「黒板に書いていないことを言っていたけれど、どんなことだった?」と尋ねる。「bの方は分からなかったけど、pはp for pencil in the pocket.と言っていたと思う」などと児童たちは自分が聴き取れた英語やその意味を発表し合い、inやonを使っていることに気付いた様子だった。そして、改めてチャンツを聞いて確認し、一緒に歌って表現を覚えた。さらに、チャールズ先生のジェスチャーと発音に合わせて、児童たちも一緒に動き、ゲーム感覚でbとpの音の聴き分けができるようにした。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

4 ペアワーク

タブレットPCを使って、ペアワークをする。画面には単語を表すイラストが表示され、その下に、bとpの文字が記されている。一人が単語を発音し、もう一人はそれを聴き取り、bとpのどちらの音で始まっているか、文字にタッチする。正しければ○、間違えていれば×が表示されるため、即座に正誤が明確になる。一通り活動を終えると、次の活動に入った。イラストを見て、それを表す単語のつづりをタッチペンで書く活動だ。これも○×が表示されるので、児童たちは正しく書くことができるまで、夢中になって何度も挑戦していた。授業の終了時間になると、児童たちはきちんとサインアウトしてからタブレットPCをシャットダウンし、片付けて授業を終えた。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

児童にインタビュー

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

ICTを活用した授業の魅力や英語の授業を受けて感じていること、将来の夢について聞いた。

YUKIの 使える

〔連載〕第3回

CLASSROOM ENGLISH!!!

昨今ではICTを活用した英語の授業が多くなりつつあり、ハワイ東海インターナショナルカレッジでも教師全員がさまざまな形でICTを使用しています。カリキュラムに適したICTを使用することによって、生徒の英語への関心や学習能力を高めることが期待できます。ICTの活用法はさまざまですが、なかでも多く使われているのがノートパソコンです。そこで今回は、ノートパソコンを英語の授業で活用する際の基本表現を紹介します！

大木 優喜子（おおき・ゆきこ）

ハワイ東海インターナショナルカレッジ准教授。東京生まれ、アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス育ちのサード・カルチャーキッド（Third Culture Kid）®。ハワイ州ハワイパシフィック大学にてTESOL（Teaching English to Speakers of Other Language）英語教育学修士号を首席で取得した。研究範囲はFlipped Classroom Model, Student Motivation in ESL Classrooms等。

※母国で生まれるが幼児期や思春期を外国で過ごし、母国と外国の二つの文化を総合した三つ目の文化を自身のアイデンティティとして構造した人。

ノートパソコンを起動・シャットダウンをする時の表現、イヤホンを使用する時の表現

(Please) take out your computers.
ノートパソコンを出してください。

(Please) turn on your computers.
ノートパソコンを起動させてください。

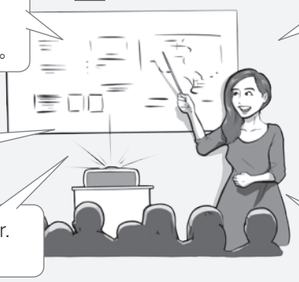
(Please) turn off [shutdown] your computers.
ノートパソコンをシャットダウンしてください。

(Please) put your computers away.
ノートパソコンをしまってください。

(Please) use your earphones [headphones].
イヤホン/ヘッドホンを使ってください。

オンライン画像、地図や動画を授業で使用する時の表現

A スクリーンに拡大した場合



Look at this picture on the screen. What do you see?
スクリーンに映っている画像を見てください。何が見えますか。

Look at the map [on Google Maps]. Where is ...?
地図/Google Mapsを見てください。…はどこですか。

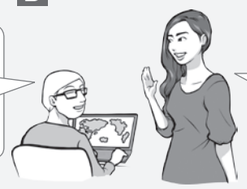
Let's watch this video about... together.
この…についての動画を一緒に観ましょう。

Let's watch this video again. Pay attention to ....
動画をもう一度観ましょう。…に注目してください。

Answer these questions about the video with your partner.
動画についての質問にパートナーと答えてください。

(Please) practice the conversation you saw with your partner.
今（動画で）観た会話をパートナーと練習してください。

B 生徒それぞれに活動させる場合



Use Google Images and find a picture of / that shows... online. Explain your picture to your partner.
…の画像（を表す画像）をGoogle Imagesを使って探してください。パートナーにあなたが見つけた画像を説明してください。

What country do you want to visit? Find it on Google Maps.
どの国に行きたいですか。Google Mapsで探してください。

私はよくGoogle画像、Google MapsやTED、YouTube等の動画を英語の授業で使っています。教科書に出てくる英単語・英語表現（イディオム等）を理解するときには、特にオンライン画像を使います。また、Google Mapsは地理などを勉強するときに最適です。地図やオンライン画像を使って、生徒一人一人が行きたい国を発表するのも良いですね。日常英会話や世界の祝日等を勉強するときには教科書準拠教材のビデオやYouTube等のオンラインのビデオを繰り返し観て、5W1Hから始まる質問を用いてディスカッションへとつなげます。最後には、動画で観た英会話をお手本に、生徒同士でジェスチャーも含めて練習します。

〔連載〕

安河内哲也先生が聞く

英語で授業 7つの鉄則

明日から使える！

【第9回】

麹町学園女子中学校高等学校
小川 浩正 先生
須賀 幸恵 先生

生徒が英語を楽しむ活動中心の授業で英語教育大改革に挑む

「アクティブ・イングリッシュ＝英語が大好きになる学園！ 麹町学園！」をキャッチフレーズに、2016年度から英語教育の大改革を進めている東京の麹町学園女子中学校高等学校。安河内哲也先生が英語科特別顧問を務めています。中学1年生の授業をティームティーチングで進める小川浩正先生と須賀幸恵先生に、英語で授業を行う7つの鉄則を伺いました。

小川 浩正（おがわ・ひろまさ）・左

教職歴30年以上のベテラン教員。中学1年生を担当。須賀先生とともに同学園の英語教育改革を推進中。

須賀 幸恵（すか・ゆきえ）・右

中学1年生の英語を担当。小川先生とともに同学園の英語教育改革を推進中。

麹町学園の授業の様子はこちら

本日の授業　中学1年蘭組

1. Warm-up activity

2. Activity1～3

3. Chants & Writing

授業が始まると、生徒たちはペアで1～30までの数字を順に言い合った後、30～1へと逆順で言い合った。生徒たちは白熱し、言い終わったペアから着席する。そして、この日のStudent Teacherを務める生徒とともに、英語の授業5つのルール（Have fun! / Keep smiling! / Be active! / Be creative! / Help each other!）と、中学1年生の8つのルール（English only / Eye Contact / Pronunciation / Compliment / High five! / Action / Reaction / Gesture）を確認した。続いて、Student Teacherによる3ヒントクイズがスタート。"He is an American character." "His body is yellow." "He wears square pants." の3つのヒントから誰のことかを推測する。"I think it's SpongeBob!" 一人の生徒の答えに全員が続いた。生徒たちが "What's your answer?" と尋ねると、答えはSpongeBobで、全員正解。Student Teacherの生徒を拍手で称えて、活動を終えた。

授業のメインとなる3つのActivityのうち、1つ目はBINGOだった。須賀先生がhappy, whose, bench...と単語を読み上げ、小川先生がスクリーンに映した25のマス目に、単語を書き記していく。"I got it!" と喜ぶ生徒の声はそのうちに "BINGO!" に変わり、単語を確認して活動を終えた。2つ目は、主語とbe動詞をジェスチャーで学ぶPunch Gameだ。生徒たちは腕を左上、真横、左下、右上、真横、右下と動かしながら、I / you / he, she, it / we / you / theyと確認した後、同様に、I am / you are / he is, she is, it is / we are / you are / they areと続ける。3つ目のActivityは縦横ドリルだ。ワークシートには縦軸7マスに主語、横軸3マスに補語が英語で書かれている。一方の生徒はマスの番号を指定し、もう一方の生徒がそのマスに書かれた日本文を頼りにbe動詞と否定形を用いて英語で述べる。こうして言い合った英語をワークシートに書き出した。

最後に "Whose is it? " の歌で所有代名詞に慣れ親しみ、チャンツでYes / Noで答える疑問形と所有代名詞を復習した。その後ワークシートの穴埋め問題を解き、ペアでシートを交換して答え合わせをする。話しては書き、書いては話すという技能統合型の活動によって学習内容の定着を図っていた。

鉄則その1 Have fun!

「英語嫌いを決してつくらないない」ということを目標にしています。“Have fun!”は、「楽しもう!」という意味合いですが、もう1つ、「生徒が授業を楽しむ」と同時に、「生徒に楽しんでもらおう」と考えています。そのためには、音と映像からヒントを得て、興味を持たせるということからスタートすれば、生徒は授業を楽しむことができ、教員も生徒を楽しませることができると考えています。生徒に英語の授業の感想を尋ねると、「英語は嫌いではない」「塾では文法中心の授業で勉強しているけれど、学校の授業では話したり歌ったりすることが多いので、構えることなく授業に参加できて楽しい」という回答が返ってきています。

鉄則その2 Teach rules!

本学園が進めている英語教育大改革「アクティブ・イングリッシュ」では、授業中に歌ったり、ゲームをしたりする活動が中心になります。そのため、生徒たちは楽しく学ぶことができるものの、正しい文法で英語を話すことができないということに陥りがちです。そこで、市販のルールブック（文法書）を使いながら、授業で扱った歌や教科書本文がどういった文法に基づいているのかを確認させるようにしています。まず先にルールを教える指導法もありますが、本学園では、鉄則1にあるように、生徒が英語を楽しむことが大切ですので、活動をしながらターゲットとなる表現を使って文法に落とし込んでいき、生徒に気付きを促す指導法を取っています。

鉄則その3 Be active!

生徒から見れば、「授業に活発に参加しよう」ということであり、教員から見れば、「生徒が活動できる場を与えよう」ということです。昨年度まで、本学園では中学校も高等学校も講義型の一斉授業中心でしたが、今年度入学した中学1年生からは、アクティブ・ラーニング形式を取り入れ、生徒主体の活動中心の授業へ転換しました。それには「どのような活動を取り入れたら、生徒が内容を理解できるか」「どのようなフレーズを使えば指示が分かりやすいか」「指示に従って生徒がすぐに動けるか」ということがカギとなります。生徒が積極的に授業に参加できるようになるには、中学1年生という英語初学者に対して、簡単なフレーズを繰り返し使うという、指導者側のスキルが求められると思います。

鉄則その4 Be creative!

生徒はいろいろな才能を持っています。大人が想像し得ないことも創り出してくれるので、それをどれだけ引き出せるのかというのが、私たちの腕の見せ所です。例えば、ある生徒は教科書のダイアログを不自然に感じ、英語の音読筆写ノートに自ら文を加筆し、「こんな文章を作ってみました」と持ってきたんです。中学1年生でこのようなことを考えられるのかというううれしさと同時に、改めて、生徒の持つ力の大きさに驚きました。また、Student Teacherの活動で、rainbowを答えにした3ヒントクイズを作った生徒は、「空を見上げると気持ちがいい」「それはいつも空にある」「7つの色がある」とヒントを出しました。この時に、whenの副詞節を使って表現したのです。これからも生徒のいろいろな引き出しを開けていきたいと思います。

鉄則その5 Help each other!

生徒からすれば「お互いに助け合いながら授業を受ける」ことであり、教員からすれば、「パートナーの先生と協力しながら、生徒を手助けできる授業を目指していきたい」と思っています。授業中、生徒たちはお互いに教え合い高め合っています。教員が説明しようとすると、生徒の表情が暗くなるのが分かるのですが、生徒同士だと積極的に話を聞きます。教員が前に立っているのはいつもの風景にすぎませんが、そこに生徒が立つと登場人物になるわけです。また一方で、教員同士の助け合いも大切で、ICTを使った授業に改善することで、教員同士が同じ教材を共有することが簡単にできるようになりました。

鉄則その6 English only!

次期学習指導要領では、中学校でも「英語の授業は英語で行うことを基本とする」ことになりますが、本学園ではすでに英語で授業を行っています。初めは、英語で生徒に話したときに、分からないと引いてしまわないかと心配しました。そこで、英語で指示を出す際に、日本語も交えながらブロークンな英語で話すようにしました。例えば、「notebook, open ね!」のような感じです。でも、それを繰り返すうちに、生徒は次第にOpen your notebook.という正しい英語が分かるようになるのです。最近では、生徒も英語での活動を通じて受け答えができるようになり、ビンゴでは“I got it!”、ワークシートを配布するときは“Here you are.”に対して“Thank you.”と自然に言葉が出てくるようになっています。

鉄則その7 Compliment!

「生徒が生徒を誉め、先生も生徒を誉める」ということを大切にしています。「アクティブ・イングリッシュ」を進めるにあたり、先進校のいろいろな研究実践に触れてきました。本学園では英語の授業の8つのルールに、ActionとReactionを入れていますが、これは、一人の生徒が発表したら、周りの生徒が反応する、それに対してComplementをするというものです。誰でも誉められればうれしくなりますし、次に発表する生徒も気持ち良く発表できます。また、生徒にはSpeaking Pointという活動をさせています。生徒が積極的にスピーキング活動に参加したことを評価するもので、25点分スタンプを集めると、成績に加算されます。この活動のなかで教員は生徒に対して「これだけのことが言えたね!」と誉め、応援しています。

interview

生徒たちの将来に役立つ英語教育を！ その思いで改革に取り組む。

安河内　麹町学園は創立110年の伝統校ですが、少子化の時代に直面し、生徒募集という壁にぶつかりました。これはこの学園だけに限ったことではなく、どこの私立学校も、特に都心の女子校でも直面している課題だと思います。その際によく取り組まれるのが、英語教育改革です。どこの学校でも、ネイティブによる英会話の授業、海外への研修旅行、タブレットやICTを活用した授業…などを取り入れています。しかし、麹町学園では、全てを最新の英語教育に一新しようと、2016年度から「アクティブ・イングリッシュ＝英語が大好きになる学園！ 麹町学園！」と銘打って、英語教育大改革を推進しています。具体的にはどのようなことに取り組んでいますか。

須賀　私たちは現在、4つの改革に取り組んでいます。1つ目は、定期試験のフォーマットを統一したことです。学園として掲げた目標に向かって、指導と評価を一体化することで、全教員が同じように授業やテストを行います。2つ目に、教科書を生徒のレベルに合わせて変更しました。2016年度に入学した中学1年生からは、検定教科書『One World』を用いて、学習指導要領に沿った生徒の言語活動主体の授業を行います。3つ目は入学試験の改革です。2017年度から東洋大学と提携し、高大連携を推進する「東洋大学グローバルコース」をスタートします。それに伴い高校募集も再開し、中学入試の形式も変えます。

安河内　そして、おそらく高校入試としては初めてだと思いますが、英検CSEスコアを全面導入するのですよね。入試においてもグローバルに通用する英語力を測るということです。

須賀　4つ目は授業改善です。ICTを活用して、生徒が英語を使うことを楽しんで学ぶ「アクティブ・ラーニング」形式の授業に転換しました。

安河内　校長先生のリーダーシップのもとで、本当に思い切った改革に踏み込みましたよね。でも、そうでもしなければ、世の中は反応してくれませんから。

小川　私は、30年以上英語教育に携わってきましたが、これまでもずっと、コミュニケーション中心の授業は目指してはいたんです。例えば、生徒に3分間スピーチをさせたり、ドラマという授業を持ったりしたこともありました。でも、中学1年生の初めて英語に触れる生徒たちに、英語の楽しさを感じてもらう活動中心の授業は、私にとってもチャレンジングでした。それだけにやりがいはありますし、その職務を与えられて幸せに思います。

安河内　今はまだ中学1年生だけでの取り組みですが、今後は全校の取り組みへ広げていかなければなりませんね。

小川　はい、すそ野をしっかりと広げていく必要は感じています。今は、授業でどのようなことができるのかを、トライアル＆エラーしながら進めている状況です。ティームティーチングをするにあたり、須賀先生は授業改善に役立つ教材を集めてくださり、それをどのように活動に取り込むかをプランニングしてくださいます。それを実際に授業で実践しているのです。「薄氷を踏む」という言葉がありますが、実は私たちはいつ、池に落ちてもおかしくないぐらいの恐怖感を持って毎日臨んでいます。でも、実践を重ねることで氷を少しずつ厚くしていき、いつかはどんなに重みがかかっても割れない厚みにしたいですね。

安河内　もし、私が小川先生の立場だったとしたら、きっと怖かったと思いますよ。従来であれば、先に文法事項を教えてから、それを使って定着させていくという教え方でしたが、この学園で実践しているのは、まったくその逆。先に新しい表現を使う体験をさせてから、ルール（文法）を教えるのですから。

小川　ある先生がおっしゃっていた「初めに体験をさせると生徒は混乱する。でも、その混乱しているところにルールを示すから、生徒は即座に内容を理解できる」という言葉に勇気付けられました。これは私の個人的な考えですが、今後は朝の音声活動も、生徒がプログラムを作っていけたらと思います。音声活動をより充実させていくためには、生徒の自主的な参加につながるような組織づくりも検討していく必要があるかもしれません。

安河内　生徒たちは、英語ができるようになりたいのです。その欲求をうまく利用して、自主性を尊重しながら、アイデアを生徒から出させていくことを考えましょう。でも、まずは授業改善が第一ですね。須賀先生は授業改善への不安はありませんでしたか。

須賀　もちろん、大きな不安はありました。でも、小川先生とティームティーチングをできるということで、安心できました。国際化が進み、世界はどんどん変わっています。そのなかで、日本だけが昔ながらの英語教育を続けていては、世界からどんどん引き離されてしまいます。自分が教わったような英語教育を今の生徒たちに提供していたら、その距離はいつまでも縮むことはありません。私は、この学校のためだけではなく、変化の激しい時代を生きて行く生徒たちに、将来役立つような英語教育をしたいのです。だからこそ、不安があっても、勇気を振り絞ってやっていかなければと思うのです。全国の英語の先生方、一緒にがんばって授業改善に取り組みましょう！

安河内　変われないことなどありません。私も長年の授業スタイルから大きく方向転換できましたから。麹町学園が現在進めている英語教育大改革は、学園の先生だけでは進められませんでした。これまでに、各方面の先生方から多大なるご協力・ご助言をいただきました。この場をお借りして、お礼を申し上げたいと思います。

（文中敬称略）

伝統校が直面した入学者数減少の壁。「アクティブ・イングリッシュ」で改革に挑む

麹町学園は創立110年の伝統ある女子校だが、実は近年、入学者数が減少傾向にあったという。

そんな状況を打破すべく、2015年に打ち出されたのが、4つの柱からなる改革プラン“VIVID Innovations KOJIMACHI”だ。このプランは、大学入試改革や社会のグローバル化にも対応すべく、「自分の得意な分野を見つけて、そのステージで鮮やかな輝きを放つ」ことができる女性の育成を目指している。4つの柱とは「思考型授業」「アクティブ・イングリッシュ」「みらい科」「グローバル・プログラム」であり、英語科が進めている英語教育大改革「アクティブ・イングリッシュ」はそのうちの1つだ。

「アクティブ・イングリッシュ」では、これまで重視されてきた「読む」「聞く」といったインプットに加え、「話す」「書く」といったアウトプットする力を強化する。これは、今後の大学進学に向けて必須となる4技能をバランス良く習得することを目標とする学園独自の英語教育プログラムである。現在、同学園では安河内哲也先生を同学園の英語科特別顧問に迎え、英語教育大改革を推進している。

そのためには、英語科教員が1つのチームとなることが不可欠だ。安河内先生の助言のもと、まずが教員の意識改革が始まった。2016年度に入学した中学1年生を教える教員全員は、同じ教科書を使って指導し、ワークシートや授業で使用するデータを分担して作成している。そして、毎回の授業の反省や情報交換を通じて、チーム一丸となって授業改善に取り組んでいるという。そして、今年度実践してきた取り組みは次の学年に受け継ぎ、さらに内容を改善、充実させていく予定だ。さらに、教員研修の機会も増やし、先進的な取り組みを実践している全国の先生方を講師に招き、ワークショップや講演会などを開催している。

そして、授業ではペアワークやグループワークを通じて、生徒の自発的発話を促し、生徒が英語を使ってアクティブにコミュニケーション活動を行う。その活動を支えるツールとしてICTを効果的に活用している。教室には、大画面モニターとパソコンを設置し、授業中に英語の音声や映像を流したり、画像を見せたり、キーセンテンスなどを表示したりと、言語活動をしながら習得した英語を定着させる工夫を取り入れている。

英語が好きになる学園を目指して〜朝の音声活動

朝8時30分。「コケコッコー！」の合図とともに、生徒たちが立ち上がり、中学校から高等学校まで全教室で一斉に、毎朝10分間の「朝の音声活動」が始まる。教室前面のスクリーンには歌詞が映し出され、流れてくる曲に合わせて、生徒たちが歌い出した。チャンツには授業で扱うキーフレーズが盛り込まれており、場面や状況が分かりやすいようにイラストも添えてある。須賀先生は生徒たちの様子を見ながら教室内を歩き回り、会話文のチャンツでは、生徒に向けてジェスチャーを織り交ぜながら語りかけように表現し、生徒たちと一緒にコミュニケーションを楽しんでいた。活動を始めてわずか3カ月ながらも、朝の音声活動で触れたフレーズは生徒たちも自然に覚えて使えるようになり、休み時間などに廊下で先生とすれ違うときに、英語で話し掛ける様子も見受けられるようになってきたという。最後は英語の歌を歌って終了。取材に訪れた日は、Stand By Meだった。歌詞と日本語訳を頼りに、生徒たちは大きな声で歌い、楽しんでいた。「朝の音声活動」は、英語を声に出して話すことを習慣付けるための活動であり、授業ともリンクした活動となっている。

〔連載〕第3回

CBT化が進む4技能試験への対応力をいかに育むか

TEAPをはじめ、英語の資格・検定試験のCBT（Computer-Based Testing）化が進み、大学入試で外部資格・検定試験の利用が広がるなか、受験生に問われるのは英語運用能力に限らない。複数の技能統合型の問題に対応し、自身の英語力を表現するためにICTを活用する能力も求められている。これからの大学入試に向けて、高等学校ではどのような授業が求められ、生徒にどのような力を付けさせればよいのか。上智大学・言語教育研究センター長の吉田研作特別招聘教授が語る。

試験をCBT化するメリットとは

上智大学と公益財団法人 日本英語検定協会が開発した、4技能型のアカデミック英語能力判定試験TEAPに、2016年よりコンピュータベースのTEAP CBTが加わりました。他の4技能型資格・検定試験もすでにCBT化されていますし、今後は4技能型資格・検定試験のほとんどがCBT化されていくのではないかと思います。

CBT化のメリット※

①受験場所が公開会場だけに限定されない
②受験者が自分のペースで問題を解き進めることができる
③技能統合型問題を出題でき、思考力・判断力・表現力を評価できる

※試験によって例外があります。

CBTの良さはまず、受験場所が公開会場だけに限定されないことにあります。現在はまだ、固定されたデスクトップコンピュータを使用するため、受験場所が限定されますが、いずれタブレット端末などの利用が可能となれば、コンピュータ教室に限定されずに普通教室でも、場合によっては自宅からでも受験ができるようになります。「いつでも、どこでも受験できる」のです。

また、受験者が自身のペースで問題を解き進めることが可能になります。試験の実施時間という大枠の時間設定は共通でも、設問ごとに試験監督から時間を制限されることなく、受験者は問題の難易度や得手不得手に応じて、自分で時間調整をしながら解き進めていくことができるのです。

なかでも、注目すべきは、技能統合的な問題を出題しやすくなることです。聞いた内容について書く、読んだ内容について話すといったプロダクティブスキルを測ることができるようになります。これにより、文部科学省が次期学習指導要領や高大接続改革などで示している「思考力・判断力・表現力等」を測ることもできます。本来、語学のテストとは個人個人の能力を測るものであるべきですから、むしろこれまで実施してきた一斉テストの形式の方が、無理があったのかもしれません。

言語活動中心の授業で身に付いた力を評価できる

例えば、スピーキングテストを例に見てみましょう。ある研究によれば、CBTによる間接スピーキングと、面接官による直接スピーキングでは、後者の方が文法的正確さや流暢さが高まるという結果が出ていますから、私は本来であれば、面接官によるスピーキングテストを行う方がよいと、個人的には思います。しかし、何万人もが受験する大学入試で直接スピーキングを行うことは、現実的ではありません。そこで、TEAP CBTは、単に指示された内容に答えるのではなく、コンピュータの画面に現れる面接官と対話することで、直接スピーキングに似た環境を用意し、できるだけ臨場感を出せるように開発されています。出題される問題も、ほかの試験とは違い、レクチャーをじっと聞いて内容をまとめるのではなく、ディスカッションや対話を通して自分の考えをまとめるというような形式となっています。

スコアはスピーキングの点数として表示されますが、必ずしもスピーキングのスキルだけを測った結果ではありません。それは聞いて書く、読んで話すといった技能統合型の問題の測定結果であり、最終的なアウトプットとしてライティングという形で表したか、スピーキングという形で表したかというだけの違いです。いずれにしても、受験者の総合的な英語力、さらには思考力・判断力・表現力を評価することができるのです。そして、これは今まさに、高等学校の学習指導要領で示され、実施している「英語の授業は英語で行うことを基本とする」に準じていますから、CBT化された試験は、生徒主体の言語活動中心の授業で実践して身に付いた力を客観的に測定することができると考えてよいでしょう。

目的に応じた使い分けが必要

大学入試で英語の4技能を測ることが求められ、2020年度から始まる予定の新テストをどのような試験にするかという議論が現在も進んでいます。また、私立大学では、TEAPや英検など外部の資格・検定試験の利用が広がっています。各大学では、アドミッションポリシーに見合う学生を入学させるために必要な試験を選択すべきであり、あらゆる試験を採用すればよいというものでもありません。アカデミック英語を重視する大学であれば、TEAPやIELTSなどが向いていますし、例えば観光学科であれば、ジェネラルな英語力を測る英検の方がよいでしょう。現在、大学には、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの3つのポリシーを明確に打ち出すことが求められています。それぞれの大学が教育内容に応じた試験を示すことで、高等学校でも生徒の進路希望に応じて、どの試験を受験すればよいかを指導しやすくなると思います。

これから先、ますます試験のCBT化が進むでしょう。PBT（Paper Based Testing）がいつまで続くのか、全てがCBT化されるのか、それはまだ分かりませんが、目的に応じて使い分けられるようになっていくかもしれません。例えば、授業中に模擬試験として実施する場合は、従来のPBTの方が一斉実施をしやすいでしょう。もちろん、長年実施されてきたテストですから、妥当性、信頼性、客観性については保証されています。CBTを実施する環境が十分に整備されていない場合や先生自身がCBTの実施に慣れていない場合は、PBTを本試験として実施することもまだしばらくは続くのではないでしょうか。

授業でICTを積極的に活用する

では、大学入試がCBT化されていく動きを見据えて、高等学校では生徒にどのような準備をさせておけばよいでしょうか。ICTを活用する能力はもちろん必要です。英語力がいくら高くても、コンピュータの操作に慣れていないことで実力を発揮できないということがないようにしておかなければなりません。それには、日頃から授業でコンピュータやタブレット端末などの機器を使って、言語活動を行うことが必要でしょう。

与えられたテーマについて調べる際にインターネットで情報を検索し、調べた結果についてグループでディスカッションし、PowerPointなどのソフトを使って、グループの発表内容をまとめる。そして、コンピュータや電子黒板、プロジェクターなどを活用して、グループごとにプレゼンテーションを行う。その内容について、質疑応答をする。英語を使って情報を得て、意見のやり取りをし、発表し合うという言語活動を行うためのツールとしてICTを活用するのです。

次期学習指導要領では、アクティブ・ラーニングやICTの活用などが盛り込まれ、英語の授業においてもそれらを実践していくことになります。生徒の言語活動を充実させるためにICTを効果的に活用し、学習内容に広がりを持たせたいものです。また、反転授業としてICTを活用することもできます。家庭ではeラーニングによる個人学習を進め、授業では言語活動を中心にグループワークを進めるのです。

ICTの活用の仕方はまだ工夫の余地があります。積極的に活用している先生の好事例を参考に、まずは使ってみることから始めてみましょう。そして、校内研修を設けて、どのような活用法があるかを共有していくことが大切です。先生自身のICTリテラシーを高め、授業をより充実させることができれば、生徒の思考力・判断力・表現力も高まり、大学入試にも対応することができることでしょう。

吉田 研作（よしだ・けんさく）
上智大学 言語教育研究センター長。特別招聘教授。上智大学大学院言語学専攻修士課程修了。ミシガン大学大学院博士課程修了。英語教育、バイリンガリズム、異文化間コミュニケーション教育の第一人者。文部科学省の外国語教育に関する各委員会などにも携わり、英語が使える日本人の育成に関する研究、活動を行っている。

大学入試から変わる日本の　英語教育

次期学習
指導要領に
向けて

高等学校編

Shinichi IZUMI

上智大学 外国語学部 教授　和泉 伸一

〔連載〕第3回

生徒と教師にとっての体験的学習の重要性

前回は、次期指導要領の実現のためには、インプットとアウトプット、分析的学習と体験的学習が融合して、それぞれが有機的に循環する学びが求められていることについて述べた。従来の英語教育が分析的学習に偏っていたという面でも、今後は体験的学習をより多く取り入れて適正なバランスを探る必要性は大きいと言える。その裏付けを示すうえでも、本稿では筆者が行った一連の研究の結果について簡単に紹介したい。

和泉 伸一（いずみ・しんいち）

ハワイ大学マノア校客員研究員、オークランド大学客員研究員を経て、2016年4月より上智大学外国語学部英語学科学科長、教授。専門は、第二言語習得研究と英語教育。主な著書として、『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』（大修館書店）、『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』（アルク）などがある。

体験的学習と英語能力・自信度の関係〜生徒の場合〜

Izumi, Shiwaku, & Okuda (2011)では、英語上級レベルの大学生を対象に、彼らのこれまでの英語学習体験と、現在持つ英語能力、そして自分の英語能力に対する自信度について調べた。その結果、体験的学習をより多く行ってきた学習者は、自分の英語能力に対しての自信と自己肯定感が高くなる傾向が見られた。それに対して、分析的学習を多く行ってきた学習者は、自信度と自己肯定感が低くなる傾向が見られた。具体的には、4技能を通じて体験的学習を行ってきた人ほど、英語使用に際しての緊張度と間違いへの恐怖度が低くなり、英語力全般において自信を持つようになっている。一方、文法書を読んだり、練習問題を行ったりして学習してきた人ほど、緊張度と間違うことへの恐怖度が高くなり、4技能全てにわたって自信度が低くなっていた。彼らが、その学習量に比して自信度を高めていた唯一の項目は、文法説明能力（文法使用能力ではない）だけであった。

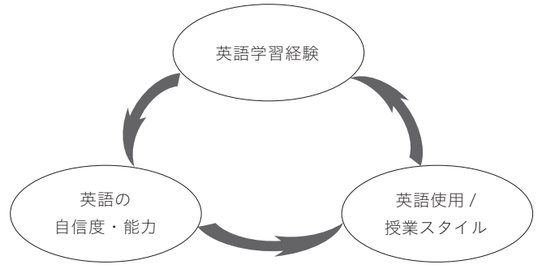
後に追加研究として行われたOgawa & Izumi (2015)では、別の大学で学ぶ中級レベルの学習者との比較分析が試みられた。その結果、英語力の低い学生は分析的学習観をより強く持ち、分析的学習に偏りがちであったのに対して、英語力の高い学生ほど体験的学習観を強く持ち、分析的学習と体験的学習をバランスよく行う傾向が見られた。これらの研究は、学習者のこれまでの学習方法がいかに彼らが現在持つ英語能力と共に、自信度にも影響を与えているかを示している。自信を付けた学習者は、大学入学後も継続して英語に触れていき、自らも積極的に使っていくことで、より一層その力に磨きをかけていく。それに対して、自信を失ってしまった学習者は、英語使用に対して躊躇・萎縮してしまい、英語使用の機会を避け、さらなる成長の機会を失ってしまいかねないことになる。

体験的学習と英語能力・自信度と授業実践 〜英語教師の場合〜

こういった研究に加えて、Izumi, Miura, & Machida (2016)では、学習者から英語教師に対象を変えて、その学習経験と現在の英語能力への自信度、そして現在の教え方との関係について調べている。その結果、英語教師も、体験的学習経験が多いほど、英語力全般に対しての自信度が高くなることが確認された。とりわけ、英語で行われた授業を受けた経験がある教師ほど、英語力全般への自信度が高くなるが、日本語で行われた授業を受けた経験と自信度の間に関係性は見られなかった。また、英語運用能力に自信がある教師ほど、コミュニカティブな授業を行い、逆に自信がない教師ほど、分析的な教え方に偏る傾向が見られた。例えば、スピーキング、リスニング、リーディング力に自信がある教師は、自由なコミュニケーション活動をより多く授業に取り入れ、英語を使って授業を行うことが多くなる。一方、これらのスキルに自信がない教師ほど、日本語を多用し、最初から答えの決まった質問をする傾向が強くなることが分かった。

「経験→自信→経験」の循環を作る

これらの研究が示すように、体験的学習の重要性は、生徒だけでなく当然教師自身にも当てはまるのである。教師自身がどれだけ体験的学習をしてきているかは、その自信と能力の向上、そしてバランスの取れた授業を行ううえで不可欠となってくる。必要なことは、経験→自信・実力→さらなる経験と実践へと結び付けていく上向きのサイクルを構築していくことである（図1参照）。



【図1】経験、自信・能力、実践のサイクル

こういったサイクルは、教育学の分野では「観察の徒弟制」(apprenticeship of observation)と呼ばれており、要は、教師は自分が生徒の時に教えられたのと同じように教える傾向があることを示している。観察の徒弟制は、良い意味でも悪い意味でも強い影響力があり、よほど注意して変えていこうと努力しない限り“デフォルト”（初期設定）としてそこに引き戻すような作用が働いてしまう。当然、現在の英語使用実践も現在進行で蓄えられる学習経験の一部となるため、サイクルは「現在」を中心に過去と未来が結び付けられ、永続的に繰り返されることになる。

問題は、上で見た研究が示すように、これまでの学び方が現在の英語力の自信度に影響を及ぼし、今後の学び方や使い方を左右してしまうことである。だからこそ、これからの英語教育では、知識の伝達ではなく、4技能を通して実際に使う体験を持たせることが、未来へ向けた上向きの循環を作る鍵となるのである。

それでは、教師自身が体験的に英語を学んだ経験が少ない場合は、どうすればよいのか。その答えは、日頃からの体験的な英語使用を今からでもどんどん増やしていくことである。英字新聞を読む。ペーパーバックを読破する。多読・多聴に挑戦する。英語で日記・授業日誌を書く。独り言で英語を話すのを日課にする、等々、毎日の生活の中でできることは意外と多い。教師の強みは、こういった自身の学習をすぐにでも授業で生かしていけることである。

直接役立つ方法としては、授業でのオーラル・イントロダクションを想定してリハーサルを重ねる。生徒との英語でのやり取りを一人でなりきってやってみる。このような練習方法は、実はこれまで筆者が自身の学習に取り入れて試してきたことでもある。体験的な学習といっても決して難しいことではない。要は、英語を使うことを楽しみながら行うことである。こう考えると、次期学習指導要領でねらいとしているのは、単なる英語の授業改革ではなく、まさに教師革命である。そして、それは毎日の一見地味な生活の中でしかなし得ないことなのである。

参照文献

Izumi, S, Shiwaku, R., & Okuda, T. (2011). Beliefs about language learning, learning strategy use, and self-efficacy/confidence of EFL learners with and without living-abroad experience. *Sophia Linguistica*, 59, pp.151-184.

Ogawa, E. & Izumi, S. (2015). Belief, strategy use, and confidence in L 2 abilities of EFL learners at different levels of L 2 proficiency. *JACET Journal* 59, pp.1-18.

Izumi, S, Miura, D., & Machida, S. (2016). Beliefs, learning strategies, teaching practices, and confidence of EFL teachers in Japan. *Sophia Linguistica*, 63, pp.117-147.

次期学習
指導要領に
向けて

中学校編

Kouichi ANO

文教大学 国際学部 教授
文教大学大学院 国際学研究科 教授
阿野 幸一

〔連載〕第3回

「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み

英語のインタラクションで深める内容理解

教科書本文の導入では、ピクチャーカードなどによる視覚情報を使って、登場人物や場面について生徒の発話を引き出します。今回は、このオーラル・イントロダクションを終えた後に、教科書の本文とイラストを使い、生徒と教師のインタラクションによって内容理解を深めていく方法を考えてみます。

阿野 幸一（あの・こういち）

文教大学国際学部教授・同大学院国際学研究科教授。専門は英語教育、応用言語学。主な著書に、中学校検定教科書『NEW HORIZON English Course 1・2・3』（共著、東京書籍）、高校検定教科書『All Aboard! Communication English Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（共著、東京書籍）、『みんなの楽しい英文法－「スタンプ例文」でわかる英語の基本』（NHK出版）など。NHKラジオ『基礎英語3』講師（2008－2012年度）、同『基礎英語2』講師（2013－2015年度）。

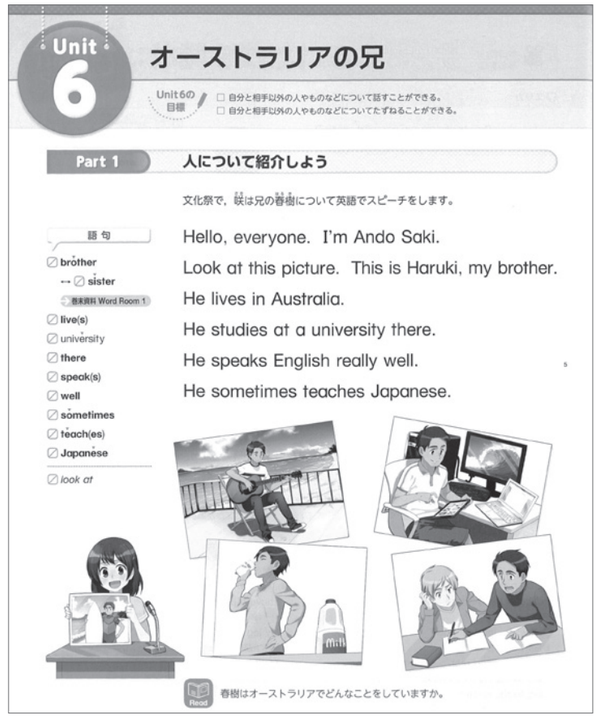
2種類の質問を使いながら

本文の内容理解では、教科書に書かれている事実を問うdisplay questionsだけを行うのではなく、生徒の想像力をかき立てるようなreferential questionsも用いることで、表面的な意味の確認にとどまることなく、いわゆる行間を読むような深い理解を求めたいものです。つまり、決まった1つの正解を生徒全員に求めるだけではなく、生徒によって答えが異なる質問をすることで、生徒それぞれが考えを膨らませ、より活発なインタラクションへとつながります。

ここでは『NEW HORIZON English Course 1』（東京書籍）、Unit 6「オーストラリアの兄」のPart 1の本文を使った生徒と教師のやり取りを考えてみます。中学1年生の咲が、自分の兄についてスピーチをしているという場面の導入を終え、教科書を開本した状態です。下線部の発問がreferential questionsです。

授業で行うインタラクション例

T: OK. This is Saki's brother. What is his name?
S1: Haruki.
T: Great! This is Saki's brother, Haruki. Does Saki like him?
S2: Yes.
T: Why do you think so?
S2: だってお兄さんについてスピーチしているから。
T: Saki is talking about Haruki in her speech, so you think Saki likes him. Well, Saki lives in Japan. Does Haruki live in Japan, too?
S3: No, he doesn't.
T: Where does he live?
S4: In Australia.
T: Yes, he is in Australia now. What does he do in Australia?
S5: He is a student.
T: Is he a junior high school student?
S5: No, a university student.
T: What does he study at university?
S6: 英語じゃない?
T: Why do you think so?
S6: He speaks English.
T: Oh, English. Well, he speaks English really well, and he uses English as a tool for communication. OK. Look at the second picture. He is using some computers. How many computers can you see?
S7: Three.
T: Do you usually use three computers at one time?
S8: No. I use one computer. Oh, Haruki studies computers!
T: Maybe he studies IT in Australia.
S9: そうなのかな?
T: Is Haruki having a good time in Australia? What does he do in his free time?
S10: He plays the guitar.
T: Where does he play the guitar?
S11: 海辺でギター弾いている!
T: At the beach?
S11: Yes, at the beach. すてき!
T: Now look at the last picture. What is he doing?
S12: He is teaching Japanese.
T: Right. He sometimes teaches Japanese to his friends. Why does he teach Japanese?



『NEW HORIZON English Course 1』（東京書籍）より P.66 Unit 6 Part1

S13: Haruki is Japanese, and his friends study Japanese in Australia.
S14: アルバイトじゃない?
T: Oh, a part-time job? He lives in Australia alone, and he needs some money. Good guess.
S15: お金はもらわないで教えていると思うけどな。
S16: Haruki is kind.
T: Oh, Haruki is kind to his friends. So, does Haruki have many friends in Australia?
S17: I think so.
T: Do you sometimes teach something to your friends?
S18: Yes.
T: What do you teach?
S18: I teach English!
T: Great! You sometimes teach English to your friends!

「咲はお兄さんが好きか?」「春樹は大学で何を勉強しているか?」「余暇には何をしているか?」「なぜ友達に日本語を教えているのか?」「オーストラリアに友達はたくさんいるか?」など、教科書本文には書かれていない質問の答えを考えるために、生徒は何度も英文を確認することになります。また、春樹の話題から、生徒自身の話題へと展開させることで、自分のことを表現する練習を行うこともできます。

このインタラクションでは、生徒の意識は春樹に向いていますが、同時にこのパートで学習する新出言語材料である三人称単数現在形のsを繰り返し使い、次の時間に導入予定のdoesを使った疑問文、さらに今後学習する現在進行形も、生徒へのインプットとして積極的に使いながら展開しています。

教科書本文の内容理解では、英文の意味を知ることも大切ですが、それ以上に、教科書本文やイラストを活用して、生徒が英語を使いながら身に付け、英語力を高めるための教材として教科書を使うという意識を持つことも大切です。

次期学習
指導要領に
向けて

小学校編

Ken OSHIRO

琉球大学 教育学部 教授　大城 賢

〔連載〕第3回

他教科との連携による授業をどのように進めるか

現行の学習指導要領（外国語活動編）解説書には、「国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」という記述があります。他教科との連携はどのような効果をもたらしたのでしょうか。また、次期学習指導要領においては他教科との連携はどのように進めていくことになるのでしょうか。読者からの質問に答える形でこの課題を検討したいと思います。

大城 賢（おおしろ・けん）

琉球大学教育学部卒業。琉球大学大学院教育学研究科（英語教育専修）修了。国立大学法人琉球大学教育学部教授。同附属中学校校長、同附属教育実践総合センター長などを歴任。学外の役職として、日本児童英語教育学会副会長、小学校英語教育学会常任理事、文部科学省研究開発学校企画評価会議委員など。

なぜ、他教科との連携は効果があるのでしょうか。

他教科で学んだ知識や体験を外国語活動に取り入れることによって、児童の知的好奇心をさらに刺激し、他教科との相乗効果を生み出すことが可能になります。例えば、社会科で学習した歴史的建造物や人物を取り入れて“What's this?”や“Who is this person?”などと聞いていくと、児童は一度他教科で学んでいるために、興味を持って活動に参加します。また、他教科の内容を取り入れることによって、各教科の学習の復習にもなります。まさに一石二鳥の効果を生み出すことができるのです。さらに、このような活動は、本物のコミュニケーションとなります。質問の意図も明確で、答える児童も自分なりの考えを答えることになるでしょう。

どのような実践が行われてきたのでしょうか。

『Hi, Friends! 1』では、国語との関連で「漢字クイズ」が取り入れられています。例えば、「海星」を見せて「読み方（ヒトデ）」を答えさせます。その次に、英語で何と言うかを推測させ、英語でも、ヒトデの形からstarfish（星の形の魚）という名前であることを示します。このような活動を通して、児童は漢字と英語の名前の付け方に共通点があることに気付きます。国語と英語の相乗効果が期待できます。

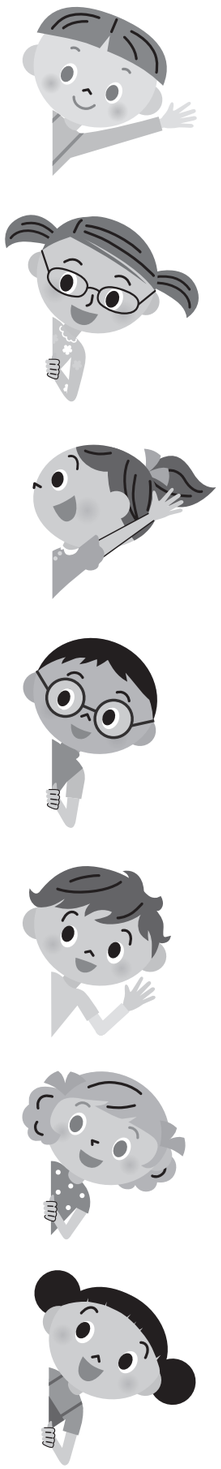
昨年の全英連大分大会では、大分市立半田小学校の江隈美佐先生の授業が公開されました。社会科や特別活動との関連を図りつつ、地元大分の食べ物や有名な場所、そして歴史上の人物などをクイズにしていく活動が展開されました[※1]。言葉には伝えたい内容がなければなりません。児童の口から出る英語は、児童が本当に伝えたいという思いがこもった発話になっていたことがとても印象的でした。このような実践例は多数報告されています。全教科を担当している担任の強みが発揮されやすい活動であったことも、他教科と連携した実践が広がった理由の1つでしょう。

次期学習指導要領では他教科との連携による授業をどのようにつくっていけばよいのでしょうか。

教育課程部会小学校部会の資料[※2]によると、中学年ではこれまでの成果を踏まえて、「他教科等で学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めることが必要である」と述べられています。また、高学年においては、「国語教育をはじめ他教科等と関連付けた学習内容や言語活動を設定することにより、思考力・判断力・表現力や主体的に学習する態度を身に付けることも重視する」と記述されています。ちなみに中学校の外国語においても具体的で身近な話題について、学校、地域、他教科等での学習内容等と関連付けながら、互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合う力が必要なことが述べられています[※3]。外国語の学習においては、ただ単に外国語の知識や技能が身に付いたというだけでは意味がありません。外国語（言葉）はその人の考えや思いを表現する手段なのです。次期学習指導要領においても、国語をはじめ他教科との連携を図ることにより、思考を深め、適切に判断し、表現していくことが重要であることが一層強調されることになるでしょう。

他教科と連携していく際に注意する点は何でしょうか。

すでに実践している学校では、外国語活動と他教科の連携は大きな効果を生み出しています。前述したように、次期学習指導要領でも外国語学習と他教科との連携はますます求められていくものとなるでしょう。注意しなければならないことは、現時点では他の教科を英語で教えるという方法（イマージョン教育）は含まれていないことです。もちろん、研究開発として実施することや、特別な学校などでイマージョン教育を実施することはまったく構いませんが、それには教員の高い技術や知識が求められます。数学や理科を中途半端に英語で教えて、その内容が深まらないものになると元も子もありません。逆に、英語の授業の中に他教科の内容を取り入れ過ぎて、調べ学習などに大半の時間を割いてしまい、英語でのコミュニケーションの時間が大幅に割かれてしまってもいけません。他教科と連携していくことは大切ですが、外国語教育においては、「英語を使う」という言葉の学習としての側面を忘れないことが大切です。

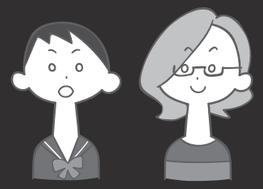


※1 授業の詳細は公益財団法人 日本英語検定協会発行『*The Sensei Times, Vol 26*』および『英語情報2・3月号』（2016年2月1日発行）に掲載。『*The Sensei Times*』は2016年4月から『英語情報』に統合）
※2 文部科学省教育課程部会小学校部会資料、平成28年3月14日
※3 文部科学省外国語ワーキンググループ資料、平成28年1月12日

Information

英検 4技能化への対応

01 「使える英語力」を身に付ける 4級・5級 スピーキングテスト



公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、2016年度第1回検定より、実用英語技能検定（英検）4級・5級の受験申込者全員が受けられる、新しいスピーキングテストをスタートしました。「使える英語力」を身に付ける第一歩として、ぜひご活用ください。

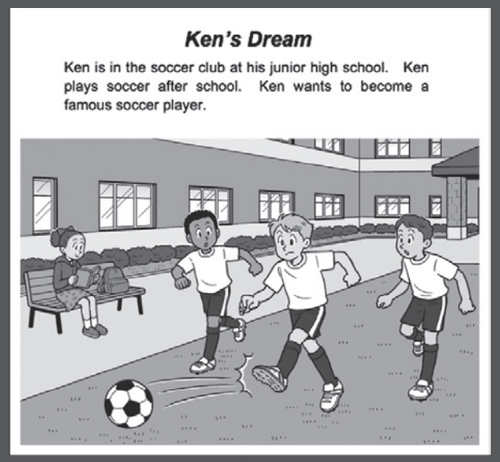
英語教育改革の流れを受けて

グローバル化の進展に伴い、コミュニケーション能力の重要性が叫ばれ、英語4技能をバランスよく身に付けることの大切さが注目されるようになりました。そうしたなか、大学入試の4技能化、中学校や高等学校の英語教育改革、そして小学校での英語教科化や外国語活動の早期開始など、今、英語教育は大きく方向を変えています。このような動きに対応し、英検協会では、英検の4技能化を進めています。今回の4級・5級におけるスピーキングテストの導入も、その一環です。英語の初期学習者にとって、「使える英語力」につながるテストとして、4級・5級にスピーキングテストを新設しました。

スピーキングテストはどんな試験？

英検4級・5級受験申込者全員に受験機会があります。手軽に受験していただくため、3級以上で実施しているような面接委員との対面式ではなく、コンピュータ端末を利用した録音形式で行います。自宅や学校で、パソコン、スマートフォン、タブレット端末などからインターネットにアクセスして受験します。受験結果はウェブ上で閲覧することができ、「（4級または5級の）スピーキングテスト合格」として判定します。なお、4級・5級では従来通りに、一次試験の結果のみで級としての資格を認定します。

〈4級 スピーキングテスト 問題見本〉



※上記四角の枠内が受験者に画面上で提示される情報です。

［質問・満点解答例］

下記質問の前に、パッセージ（英文）の黙読・音読タスクが課されます。

No.1 Please look at the passage. What does Ken want to become?
—— He wants to become a famous soccer player.

No.2 When does Ken play soccer?
—— He plays after school.

No.3 Please look at the picture. What is the girl doing?
—— She is reading a book.

No.4 Do you like to play sports?
Yes. → What sport do you play?
—— I play tennis.

特設サイトをオープン！

英検4級・5級スピーキングテストを受験される方のために、スピーキングテストについてより詳しくご紹介する特設サイトをご用意しました。テストの特長、導入の背景とねらい、テストの合否判定、テスト受験の流れのほか、よくあるご質問へのご回答もまとめて掲載しています。また、英検IDとパスワードをお持ちの方を対象とする「受験サイト」や「合否閲覧」ページもありますので、ご確認ください。

英検 4級・5級スピーキング　検索

02 ライティング導入で 2級も4技能試験に

大学入試の4技能化、外部の資格・検定試験活用の動きに対応し、英検協会は、高等学校卒業レベルの指標とされる英検2級に、2016年度第1回検定より「ライティング」を導入し、4技能化が実現しました。さらに、試験結果は、国際基準規格であるCEFRと相関させた英検CSEによる技能別スコアに基づいて合否判定を行います。

大学入試の4技能化に対応

2015年3月、文部科学省の諮問機関である「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」（以下、「連絡協議会」）から、「英語の資格・検定試験の活動促進に関する行動指針（案）」が発表されました。そこには大学や高等学校をはじめとする各学校は、入学者選抜や生徒の英語力評価に4技能をバランスよく測定できる資格・検定試験の効果的活用を促進する旨が明記されています。英検協会では、グローバル人材育成のために、中・高生に広く受験いただいている英検の4技能化を進める必要性を認識し、まずは高等学校卒業レベルの指標とされる2級の4技能化を進めました。

2級ライティングはどんな試験？

「2級」ライティングの問題は、「1級」「準1級」と同様に、英検の審査基準を遵守し、そのうえで高等学校の学習指導要領の内容と国際基準規格であるCEFR※レベル（2級はB1レベル）と一致させることを意識して開発されました。技能としての英語のみならず、日頃の生活や学習を通じて身に付けた知識の活用を求め、受験者は与えられたトピックに対する意見とその裏付けとなる理由を、適切な語彙と文法を使用しながら英文で論述する能力が試されます。

※「CEFR」とは、Common European Framework of Reference for Languagesの略。語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際基準規格。欧米で幅広く導入され6つのレベルが設定されています。

〈2級ライティングテスト・問題見本〉

●以下のTOPICについて、あなたの意見とその理由を2つ書きなさい。
●POINTSは理由を書く際の参考となる観点を示したものです。
　ただし、これら以外の観点から理由を書いても構いません。
●語数の目安は80語～100語です。

TOPIC

These days, some people buy things on the Internet. Do you think more people will do so in the future?

POINTS

- Price
- Safety
- Technology

［満点解答例］

I think that Internet shopping will become more popular in the future. First, Internet shopping is very convenient. Some people are very busy during the day, so they do not have time to go shopping at regular shops. Internet shops do not close at night like regular shops do, so people can shop for things whenever they like. Also, Internet shopping is often cheaper than buying things in stores. People always like buying things cheaply, so they will start shopping on the Internet more in the future.（87語）

英検ウェブサイト掲載の過去問をご活用ください

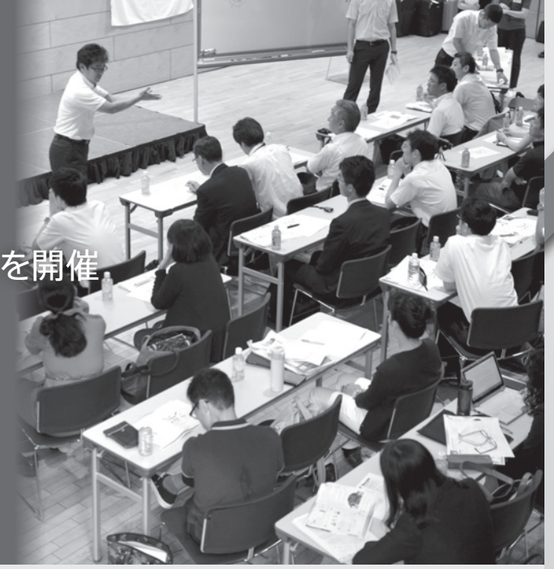
英検2級の過去3回分の問題および解答を英検ウェブサイトにて掲載しています。受験対策に役立つコンテンツもご用意していますので、受験前の準備や対策にぜひご活用ください。

英検　過去問　検索

EVENT REPORT

4技能統合型授業への改善を考える3日間

「第4回 全英連・英検協会共催 夏季研修会」を開催



全国英語教育研究団体連合会（全英連）は、教員の指導力向上を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）とともに、毎年7月に3日間の夏季研修会を東京都内で開催している。今年も全国から約30名の中学校・高等学校の教員たちが集まり、実践経験豊富な指導講師の指導・助言を受けながら、グループごとに授業案と評価案を作成し、発表した。

生徒主体の授業への改善の必要性を理解

夏季研修会は今年で4回目。初日はオーストラリア大使館（東京都港区）を会場に、上智大学・言語教育研究センター長の吉田研作特別招聘教授による基調講演が行われた。文部科学省の「英語教育の在り方に関する有識者会議」座長などを務める吉田特別招聘教授は、2020年の次期学習指導要領改訂や大学入試センター試験に代わる試験の導入に向けて、英語教育改革や高大接続改革などが進むなか、なぜ、4技能統合型の授業が求められるのかについて説いた。参加者たちは、自身の授業改善に役立つより多くの学びを得たいと、熱心に講演に聞き入っていた。その後、オーストラリア大使館の広報スタッフによる、オーストラリアの文化や教育、伝統の紹介があり、参加者たちは異文化への興味を広げ、理解を深めた。

グループごとに授業案と評価案を作成

2日目と3日目は、会場を英検協会へ移して実施。参加者たちは、中学校と高等学校でそれぞれ、4、5名ずつでグループに分かれて、授業案と評価案づくりに取り組んだ。今年は国際教養大学の内田浩樹教授、新潟県立新発田高等学校の根立望先生、茨城県笠間市教育委員会の入之内昌徳指導主事が指導講師として指導・助言にあたった。

各グループでは参加者各自が指導案を持ち寄り、議論を重ね、講師の指導を仰ぎながら、教科書の指定のレッスンの授業案をまとめる。参加者たちは、生徒にどのような力を付けさせたいのかという到達目標に基づき、そのためにどのような言語活動を取り入れるべきなのか、日頃から実践しているさまざまな活動や指導方法などを紹介し合い、生徒主体の4技能統合型の授業を考えた。グループから疑問や質問があれば講師から助言を受け、意見交換しながら、より良い方向性を導き出していた。誰もが時間を忘れて、最終日の発表に向けた準備に夢中な様子だった。

授業案に基づく模擬授業を実演

最終日となる3日目は、各グループがまとめ上げた授業案と評価案の発表となる。どのグループも参加者同士の絆が深まり、チームとしての一体感が生まれていた。中学校も高等学校もみな、英語で授業を行い、参加者を生徒に見立て、生徒主体の言語活動を取り入れた技能統合型の授業が発表された。全ての発表が終わると、講師の講評があり、より良い授業づくりのために力を尽くした参加者たちの努力を称え合い、研修会は幕を閉じた。

閉会後、鹿児島県の下甑島から参加した薩摩川内市立海陽中学校の松元紗智子先生は「吉田研作先生の講演は、自分の授業を見つめ直すよい機会となりました。自分がアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業をつくることができていないことに気付き、技能統合型授業やCLIL（Content and Language Integrated Learning）の大切さを痛感しました。また、全国の先生方とともに互いの指導観をぶつけ合いながら授業案をまとめ上げるという貴重な経験ができ、自分がこれから指導計画をつくるうえで大いに参考になりました」と、目を輝かせて語った。

※写真は昨年度の夏季研修会より

Information

思考力・判断力・表現力を測定する4技能統合型テスト TEAP CBT

TEAP CBTは、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）と上智大学が共同開発した4技能型アカデミック英語能力判定試験「TEAP」のコンピュータテストです。ICTの多様な機能を利用したこのテストによって、「思考力・判断力・表現力」に重点を置いた英語運用能力の測定が実現されました。2016年秋から実施するTEAP CBTとはどのようなテストなのかを紹介します。

TEAP CBT開発の背景

TEAP CBTは、従来のTEAPの「大学で学習・研究する際に必要とされる英語運用能力をより正確に測定する」というコンセプトを継承し、さらに、グローバルに活動するために必要とされる実践的な英語運用能力を複合的に測定するテストです。現在、英語教育改革や大学入試改革が進むなか、「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく測定できる外部検定試験を入試に活用する動きが加速しています。今後は、4技能の測定にとどまらず、複数の技能を統合的に運用する能力や、新学習指導要領に準拠した「思考力・判断力・表現力」を加味した、より実践的で多面的なテストの開発が求められていきます。そこで、英検協会では、このような現状を踏まえ、TEAPの発展形として、株式会社教育測定研究所とともに、コンピュータを用いた新テスト「TEAP CBT」の開発を進めてきました。

TEAP CBTはどんな試験？

1 ICTを活用し、大学で必要とされる実践的な英語力を測る！

英語での指示を解釈しながらコンピュータ上で操作を行うICT問題を導入し、より高度な思考力・判断力・表現力を問う問題を出題します。画像を組み合わせたICT操作により解答させる形式にすることで、受験者が本文内容を正しく理解し、適切に推論しているかを測定することができます。

2 学習・研究で求められる「ライティング」と「スピーキング」のスキルの幅広い能力レンジを測定！

「ライティング」と「スピーキング」では、問題数を増やすことにより、高い測定精度を保ちつつ、広範囲の難易度の問題を出題することを通して、幅広い能力レンジの測定を行います。

★「ライティング」では、統合型の問題を増やすことで、大学入学後に必要となる実践的なライティング能力を測定

★「スピーキング」では、大学の日常的な会話からアカデミックな要約問題までを、オンライン対面式で実施

上智大学が入試にTEAP CBTを採用

TEAP CBTは、大学入試で活用できる「英語外部検定試験」です。上智大学では、2016年10月に東京と大阪で実施するTEAP CBTを「一般入学試験（TEAP利用型）」として採用しました。従来のTEAP同様に、TEAP CBTを4技能受験し、学科が設定する基準スコアを4技能の総合点で満たしていれば出願可能とするものです。今後、TEAP CBTの採用大学は拡大していく予定です。

TEAP CBTに関する最新情報は、ウェブサイトにてご確認ください。サンプル問題の無料体験もご用意していますので、TEAP CBTの問題構成や出題形式に慣れていただき、受験の事前準備にお役立てください。

TEAP CBT　検索

http://www.eiken.or.jp/teap/cbt/

TEAP CBTに関するお問い合わせ

英検サービスセンター（TEAP運営事務局）
TEL：03-3266-6556
※平日9:30〜17:00（祝日を除く）

第6回 TEAP連絡協議会

TEAPを活用した4技能入試で日本の英語教育の改善を推進!

入試改革を進めてきた大学の取り組みを、英語教育関係者と共有するため、「第6回 TEAP連絡協議会」が6月7日、早稲田大学の早稲田キャンパス国際会議場 井深大記念ホールにて開催された。テーマは「4技能入試の現状と未来〜2016年度入試を終えて、これからどうなる〜」。スピーカーの英語教育に対する情熱的な思いが、会場を熱くさせていた。

調査結果や導入事例から見えた4技能入試への期待

開会にあたり、早稲田大学 副総長の橋本周司氏は、「文部科学省や各大学からのさまざまな話を聞き、新しいヒントを持ち帰ってほしい」と、参加者に呼び掛けた。

最初に登壇したのは、文部科学省 国際教育課 主任学校教育官（国際教育担当）の齋藤潔氏だ。「我が国における英語4技能入試の現状と展望」と題し、大学入試における4技能入試に資格試験の活用実態に関する調査内容について解説。入学者選抜で英語資格・検定試験を活用している大学や、利用した学生への調査結果を説明した。

続いて、公益財団法人 日本英語検定協会の松平知樹より「2015年度のTEAP受験状況分析」「2017年度入試TEAP活用状況」「本年度から実施するTEAP CBTのご紹介」の3点について説明した。（TEAP CBTについてはP.31参照）

そして、上智大学 理工学部教授・学事局入学センター長 伊呂原隆氏が「2016年度入試概況および2017年度に向けての展望」をテーマに、同大の「TEAP利用型入試」の結果分析を詳しく解説。さまざまな分析の結果、「上智大学の意思として、TEAP利用型入試をさらに拡張するという意気込みで続ける」と語った。

次に、立教大学 経営学部教授（入試委員）・グローバル教育センター長の松本茂氏が「立教大学における4技能入試〜導入・結果・展望〜」と題して講演し、立教大が4技能入試を導入した目的、「グローバル人材の育成」などについて解説した。松本氏は「日本の英語教育を皆で改善していこう」と呼び掛けて締めくくった。

講演プログラムの最後は、早稲田大学 文学学術院教授の安藤文人氏が、「大学が考える英語4技能化と入試改革―早稲田大学文科構想学部・文学部の場合―」を語った。2004年度の英語カリキュラム全面的改編から、来年度入試で4技能導入に至った経緯を話し、「4技能にわたり言語を使おうとする学生を求める」と伝えた。

「英語教育を改善しよう!」強い思いに共感の大きな拍手

最後に、「4技能入試元年でみえた課題と今後」をテーマにパネルディスカッションが行われた。松平知樹がモデレーターを務め、齋藤潔氏、伊呂原隆氏、松本茂氏、安藤文人氏の4名がパネリストとして登壇。来場者から寄せられた質問に回答する形で進行され、“大学入学希望者学力評価テストの展望とTEAPなど外部試験の関連性”や、“4技能を教育することの意義と必要性”、“今後の大学教育の方向性と大学が求める学生像”などについて、深みのある意見交換が展開された。パネリストたちの「日本の英語教育を改善したい」という、思いの込もったメッセージで会場は熱気に包まれ、大きな拍手が巻き起こった。

閉会後の情報交換会では、参加者が「英語教育を良くしたい、という思いを皆さんと共有できた」と目を輝かせていた。

TEAP活用事例 第9回：東洋大学

TOYO UNIVERSITY

大学の国際化を推進するうえで4技能を測る必要に迫られた

東洋大学は2014年度にスーパーグローバル大学創成支援（タイプB）に採択され、大学の国際化への動きが加速している。加藤氏は「今後は留学生や海外で教育を受けた学生を積極的に受け入れるため、英語での開講科目を増やし、海外留学や海外でのボランティア参加など、学生の海外派遣をさらに強化していきます。そのためにも、学生の英語4技能を向上させなければなりません」と述べる。そして、入試の段階から4技能を測る必要があるとし、英語外部試験によって4技能を測り、大学が目指す方向性に見合う学生を確保するため、2017年度入試より新たな入試制度を開始することとした。

「英語外部試験利用入試」では、TEAPや実用英語技能検定（英検）などのスコアを利用でき、一般入試の英語の試験の得点として換算される。試験ごとの基準スコアは次の通りだ。

基準スコア（抜粋）

TEAP（4技能）	253		100点換算
	225		90点換算
	195		80点換算
	188		70点換算
英検	2級	CSE 2150※	100点換算
		CSE 1980※	90点換算
	準2級	CSE 1600※	80点換算
		CSE 1500※	70点換算

※2016年6月以降に取得したスコア

これらは、2017年4月開設の情報連携学部や国際学部、国際観光学部を含む12学部統一の基準である。この入試は2月1日、8日、9日、10日、11日の「一般入試 前期日程」で実施し、募集人員は約2,800名。出願時に、大学独自の英語試験受験、もしくは英語外部試験のスコア利用受験を選択し、事前登録するが、英語外部試験を利用したうえで、大学独自の英語試験を受験することも可能。その場合はいずれか高得点の結果で合否を判定する。なお、英語外部試験のスコアを利用する場合には、入学検定料の割引制度が適用され、一般入試の入学検定料1出願あたり35,000円が20,000円となる。

思考力・判断力・表現力等を持った学生が求められる

「大学独自で4技能を測る試験を作り、実施していくことは難しい。外部試験は信頼性と妥当性が高く、4技能を客観的に測ることができる」と、加藤氏は各学部長に「英語外部試験利用入試」の導入を提案し、了承を得た。東洋大学が「英語外部試験利用入試」で入学させたいのは、「自分で物事を考え、判断し、表現する力や、他者と協働していく力」を持った学生だ。英語はそのためのツールとして習得すべきだと、加藤氏は強調する。

2017年度入試では「Web体験授業型入試」も導入する。受験生は入試情報サイトで公開されている指定の講義動画で出された課題について考察し、プレゼンテーションを行う。学力のみではなく、「思考力・判断力・表現力等」も測る試験だ。

自ら考え、判断し、表現する力を持ち、他者と協働するグローバルな学生を求めて

東洋大学は2017年度入試より、「一般入試 前期日程」において、全学規模で「英語外部試験利用入試」を導入する。「2014年度のスーパーグローバル大学採択や2017年度の新学部の開設など、全学を挙げて国際化を推進する動きを踏まえ、さらに社会のグローバル化の進展や2020年度に始まる新テストを見据えれば、『英語外部試験利用入試』の導入は自然な流れであった」と考える同大理事・入試部長の加藤建二氏にお話を伺った。

東洋大学理事・入試部長
加藤 建二 氏

日本の英語教育の底上げにつながってほしい

加藤氏は「英語外部試験利用入試」は、近いうちに大学入試のスタンダードになるだろう」と考える。そして「本学は受験生が8万人超と規模が大きく、受験生にとっても、他大学にとっても影響力が強いと思われます。だからこそ、全学規模での導入に踏み切ったのです」と導入の背景を説明する。

さらに「大学は、高校生が受験対策のために学習するのではなく、高校での授業をしっかり受けていれば結果を出すことのできるしくみを整えなければなりません。本学が『英語外部試験利用入試』を導入することで、他大学でもその導入が広がり、多くの高校生が英語4技能の必要性を感じて英語外部試験を受験するようになれば、高校での授業改善もますます進み、日本の英語教育の底上げにもつながるのではないでしょうか」と力強く語った。

多文化社会のカナダで のびやかに英語と世界を学ぶ

～在日大使館に聞く、カナダ留学の魅力～

来年、建国150周年を迎えるカナダ。
積極的に移民を受け入れてきた歴史を持ち、
多様な文化がそれぞれの独自性を保ちながら、
共生するその様子から、「モザイク国家」とも称される。
教育と生活の水準は世界トップレベルで、
留学生にも心地良い環境が整っているため、
日本人の留学先として人気が高い。
教育現場で留学という選択肢が増える今、
カナダ留学ならではの魅力を掘り下げてみたい。

カナダ大使館広報・教育プロモーション
担当官の秋山めぐみさん

©カナダ観光局

©カナダ観光局

E・H・ノーマン図書館

カナダと日本の相互理解に尽力したカナダ人歴史学者・外交官、E・ハーバート・ノーマンを記念して作られた、カナダ大使館内の「E・H・ノーマン図書館」。留学資料が豊富にそろう。一般公開は月～金の12:30～16:30。

©カナダ大使館広報部

カナダ留学フェア

毎年、在日カナダ大使館は春と秋に留学フェアを開催。教育者向けのワークショップなども。

国を挙げて留学生を歓迎
初めての留学でも安心の環境

北米大陸に位置し、英語とフランス語の2言語を公用語とするカナダは現在、「2022年までに年間45万人の留学生を受け入れる」という留学生倍増計画の下、世界各国の留学生を積極的に受け入れている。カナダ移民省が発表する統計によれば、留学生受け入れ数は2014年ですでに約30万人以上で、計画よりも早い段階で目標を達成する勢いで増加している。

カナダは日本人の交換留学や語学留学の目的先としても人気が高い。例えばカナダの語学学校連盟「Languages Canada」による年次調査によれば、2015年にはおよそ2万人の日本人留学生がカナダの語学プログラムで学んだ。その数は、ブラジルからの留学生に次いで2番目に多い。

「カナダは今、国を挙げて積極的に留学生を受け入れています。2週間から1学期、そして1年以上の受け入れまで、柔軟に対応しています。しかも、日本国籍をお持ちの方であれば、6カ月までの滞在や就学なら、就学許可証（Study permit）が免除されます。交換留学の提携数も年々増え、現在は500校以上です」と、話すのはカナダ大使館広報・教育プロモーション担当官の秋山めぐみさんだ。「カナダ留学フェア」などの担当者として、カナダ留学の魅力を次のように述べる。

第一の魅力は、そのグローバルな環境だという。カナダは北米大陸にありながら、英仏両国の文化を受け継ぎ、現在も多くの移民を受け入れている。多文化が共存するという歴史的な背景から、1971年には民族や人種の多様性を尊重し、全ての人が平等に社会参加できるような国づくりを目指して、「多文化主義政策（multiculturalism）」を世界で初めて導入した。「現在、カナダは毎年20万人以上の移民を受け入れており、人口の5、6人に1人は移民1世です。カナダのなかにいるだけでも、実に国際色豊かな生活をしていただけるでしょう」と、秋山さん。また、「カナダ人は多民族を尊重する教育を受けているため、留学生だから、外国人だからということで窮屈さは感じることは稀」だという。

次に、留学といえば治安や生活環境が気になるが、カナダは英語圏のなかでも特に良好で、「安全で住みやすい国」として評判が高い。英誌エコノミストが発表する、『世界で最も住みやすい都市ランキング』で、過去に9年連続で1位に選ばれたのが、カナダのバンクーバーだ。トロントやカルガリーも、トップ10位にランクインしている。

「教育の質の高さはもちろん、先生方や親御さんが安心して生徒を送り出せる環境が整っています。特に、初めての留学にはおすすめですね。『交換留学プログラムで初めて行ったのがカナダだったので、大学もカナダに行きたい』といった留学体験者の声もよく聞かれます」と、秋山さんは話す。なお、寒い国というイメージを持つ人も多いが、バンクーバーなどの比較的温暖な地域の気温は、冬でも氷点下になることはあまりない。

クセのないグローバル・イングリッシュと
ニーズで選べる柔軟なプログラム

留学では「英語力を高めたい」というニーズが高いが、カナダの英語にはどんな特徴があるのだろうか。「カナダで話される英語はクリアで聴き取りやすく、あまりクセがありません。これは移民が多い国なので、お互いに聴き取りやすいように話そうとしてきたから、と言われています」と、秋山さん。これからの多文化共生時代に必要な、グローバル・イングリッシュを習得し、実践できる環境だと言えよう。

カナダ留学の情報を入手するには、「カナダ留学フェア」へ参加するのがよいという。カナダ大使館は年2回、春と秋にカナダ留学フェアを開催しており、毎回、カナダから70を越える教育機関が参加する。留学の最新情報や留学体験談が聞けるセミナーや、提携校の開拓やプログラム相談ができる教育関係者向けのワークショップ（東京会場のみ）も用意される。参加校のブースでは、来日スタッフと直接会い、日本語で相談することもできる。

留学フェアの期間外でも、在日カナダ大使館内（東京都港区）の「E・H・ノーマン図書館」には、カナダ留学やカナダの文化に関する図書や視聴覚資料が豊富に揃っており、平日には一般利用ができる。学校単位での見学も随時受け付けている（要事前申し込み）。

「留学体験者の皆さんから、『カナダで多様な文化に触れることで、客観的に日本を見つめることができ、自分の成長を感じている』という声を日々聞いています。小学校から高等学校、大学、語学（英語・フランス語）、ワーキングホリデーまで、幅広いスタイルでの留学が可能です。チャンスがあれば短くても長くても、ぜひ一度はカナダに留学してみていただきたいです」と、秋山さんはエールを送った。

カナダ大使館主催「カナダ留学フェア2016秋」開催情報

一般向けには、最新情報や留学体験者の話が聞けるコーナー、留学希望の中・高・大学生、社会人向けのセミナー、など。また、教育関係者向けには、提携校の開拓やプログラム相談ができるワークショップ（東京のみ）などを開催。

【東京開催】日時：11月2日（水）、11月3日（木・祝）
会場：カナダ大使館（〒107-0052 東京都港区赤坂7-3-38）
【大阪開催】日時：11月5日（土）
会場：梅田センタービル16階（〒530-0015 大阪市北区中崎西2-4-12）
詳しくは特設サイト「カナダ留学フェア特設サイト」http://www.canada-ryugaku-fair.com/

「カナダ・エクスプローラー」

http://www.canadaexplorer.jp/

カナダを象徴する動物であるビーバーが、カナダの自然、歴史、人々、経済などを3言語（日本語・英語・フランス語）で楽しく教えてくれるサイト。クイズやパズルで楽しみながら勉強できる。

「精力善用」「自他共栄」の精神を身に付け国際人へ

灘中学校・高等学校　和田 孫博 校長

生徒の意思を尊重し
海外進学希望の生徒をサポート

1927年に、灘地方で酒造業を営む嘉納家と山邑家によって創立された旧制灘中学校。嘉納家の縁戚にあたり、講道館柔道の創始者で、東京高等師範学校（現・筑波大学）やその附属校（現・筑波大附属中学校・高等学校）などの学校長職を25年間ほど務めた嘉納治五郎を顧問に迎えて開校した。「精力善用（自らの力を見極め、最大限に活用すること）」「自他共栄（各自が精力善用を実践することで力が合わさり、幸福な世の中が実現する）」を校是に掲げた。第二次世界大戦後には、中高6年一貫教育の灘中学校・高等学校として再出発。伝統である生徒の自主性を重んじた自由でのびやかな校風のもと、昭和40年代以降は全国屈指の進学校へと躍進を遂げた。ノーベル賞受賞者をはじめ、政財界などで活躍する卒業生は数多い。

同校では、各学年7〜8名の教員が担任団を構成し、生徒が高校を卒業するまで、6年間持ち上がる。担任団は学習面、生活面の指導、さらには進路指導にもあたる。とはいえ、進路希望はあくまで生徒の意思を尊重し、「教員は背中を押す程度」だと和田校長は言う。そうしたなか、近年では海外進学を選ぶ生徒が増えてきた。「海外進学を推奨してはいませんが、留学フェアに参加したり、海外進学をした先輩から情報を得たりと、希望者は自ら求めて動いています。海外進学の場合は、進路指導部ではなく国際交流担当の三窪法正先生が窓口となり、英文での出願書類を作成するなど、できる限りのサポートをしています」。海外進学希望者は、三窪先生と担任の先生と話し合いを重ねながら、「本当に海外の大学に進学したいのか、日本の大学へ進学してから交換留学をするのか、海外の大学院へ進学するのか」など、意思確認をする。

「海外の大学に進学した後は膨大な課題に追われ、多量の文献を読み込まなければなりませんから、英語の読解力、しかも速読して内容をつかむ力が必要です。さらに、授業はディスカッション形式で進められます。物おじせずに主張していかなければなりません。日本の大学でしっかりと学んで研究課題を持ったうえで、海外の大学院へ進学するという選択肢もあります。何のために海外で学ぶのかを見極めてほしいと思います」

英検を活用して4技能を高め
相互理解と意思疎通を深める英語教育

同校では基礎基盤を大切にしている。教科書や教材の選定は学年裁量とし、6年間を通じて4技能を段階的に高めるカリキュラムが組まれる。そして、教科書の内容を定着させるため、実用英語技能検定（英検）を活用している。例えば、過去問から類似文を例文として紹介するほか、中学1年で英検4級、中学2年で3級、中学3年で準2級、高校1年で2級、高校2年で準1級と、英検を学習到達目標に掲げて日頃の学習の成果を測るなどだ。CALL教室やネイティブ教員による授業など、生の英語に触れる機会も多い。中学校では会話を中心に、自分の意見を発表する力を高め、高校ではプレゼンテーションやライティングに力を入れ、発信力を磨く。

和田校長は「近い将来、国内にいながらにして、日本語以外の言語が必要な時代がやってくるでしょう。そうした社会では、異文化の人々と意思の疎通が必然となり、世界共通語である英語の果たす役割は大きいのです。そこで、英語を読む力はもちろん、自分の考えを伝え、相手の意見を受け入れることができる力が必要です。そして、日本人としてのアイデンティティを持ち、異文化の人々との相互理解を深めて意思疎通を図ることも大切です。そのためにも、中学校、高校の英語教育はもちろん、教養教育の重要性を生徒にも伝えています」と述べる。

教養教育を大切に
知的好奇心を引き出す授業

同校では3年前に、卒業生でもあり、東京大学で総長を務めた濱田純一氏の記念講演を行った。演題は「よりグローバルに、よりタフに」だ。濱田氏は「グローバル人材とは単に外国で活躍できる人という意味ではない」と説き、「これまで想像もしなかった大きな変化が起こり、未知の状況に直面しても、自ら考え課題を克服していくことのできる人こそが“グローバル”であり、それを続けていけることを“タフ”という」と、生徒たちに訴えかけた。

その講演を受けて和田校長は、グローバル人材に対する認識を新たにしたという。「急激な社会の変化に対応するためには、専門性ではなくリベラルアーツが必要であり、中・高で学ぶ内容である」と和田校長。だからこそ、受験科目だけに力を注いで入試を突破することよりも、芸術や体育も含め、教養として習得すべき内容を中・高段階から学ぶことが大切だと述べる。

「本校の先生方は、さまざまな工夫を凝らして生徒の知的好奇心を引き出し、教養教育につながる指導を行っています。一斉講義型の授業ではなく、教員から生徒に向けて課題を投げ掛けて話し合ったり、レポートをまとめさせたりといった、今、巷で言われているアクティブ・ラーニングのような授業を取り入れている先生もいます。生徒たちも興味に応じて高度な質問をしてきますし、先生方はそれにしっかりと応えています。そうして学びへの興味を深め、国際科学オリンピックや模擬国連などに挑戦する生徒が出てくるのです」

グローバル人材のロールモデル
嘉納治五郎の精神を受け継いで

生徒の自主性を重んじる同校では、生徒の知的好奇心を刺激する授業や課外活動を行い、グローバル人材の素養を育んでいく。それも全ては校是である「精力善用」「自他共栄」に立ち返る。

「嘉納治五郎先生は、真の国際人でした。柔道を世界に広め、アジア初のIOC（国際オリンピック委員会）の委員も務めました。幻の五輪となった1940年の東京五輪招致でも、流暢な英語演説を行ったことでも有名です。嘉納先生は若い頃から鍛えた英語を駆使し、柔道を世界に普及することを通じて、日本に対する理解を深めることに務めました。まさに国際人としての豊かな人間性を備えた人物だったのです。嘉納先生は生徒に身近なグローバル人材のロールモデルです」

和田校長は生徒たちに、6年間を通じて自己のアイデンティティを確立し、自分の力を最大限に発揮してほしいと願う。そして、各自が自分の力を発揮しながら切磋琢磨し、皆で力を合わせて平和で幸福な世界をつくってほしいと強調する。それこそが、「精力善用」「自他共栄」なのだ。嘉納治五郎の精神を受け継ぎ、社会に貢献できる人を育てるべく、同校は今後もリベラルアーツ教育を重視していく。

スーパーグローバルハイスクール（SGH）

Super Global High School

正解のないグローバルな課題を
解決する手だてを考えられる人を育てる

第９回　筑波大学附属高等学校

グローバル・シチズンを目指し さらにグローバル・リーダーへ

国立である筑波大学附属高等学校は、筑波大学の附属学校のうちの１校だ。大学や、同じ地区にある附属小・中学校とも連携しながら教育研究を行っている。スーパーグローバルハイスクール（SGH）の幹事校でもある同校では、グローバル・シチズン（地球市民）の育成を目指し、全生徒が参加する「SGHスタディ」などを展開。今後ますます必要となる課題研究スキルの向上を推進している。

SGHプログラム：日中高校生交流における中国の高校生との記念撮影

伝統的に行っていた教育活動を SGH活動として展開

筑波大学附属高等学校は、SGHに加わる際に「小・中・高・大が連携した課題解決によるグローバル人材の育成」を目標として掲げた。もともと、附属小・中学校から“自ら発表する学習”を多く取り入れ、その基礎力を高校での課題解決学習につなぐ、という伝統がある。また、附属小には英語の専科教諭がおり、中・高の英語学習では1922（大正11）年に来校した外国語教育のパイオニアH.E.Palmer氏がこの高校で実践したオーラルメソッドを受け継ぎ、「話す」「聞く」が重視されてきた。2014年にSGHの指定を受けたが、「SGHによって新しい活動を始めたというより、従来から行っていた教育活動をSGHの取り組みに移行した」と、SGH担当の熊田亘先生は語る。

SGHに応募した理由の１つは、文部科学省が求めるSGHの活動が、これまで伝統的に行ってきた教育活動と非常に重なっていたからである。また、同校では国際交流も単に語学研修ではなく、調査・研究の発表や海外の生徒との議論を行事として実施していたため、SGHの方針と合致すると捉えたからだ。そして同校は全国のSGHの中で幹事校となり、筑波大学の教育局と連携しながらSGH各校を取りまとめている。

SGHに関わる取り組みによって育てたい生徒の力として、次の８点を掲げている。

1. 専門性と教養
2. 問題解決力
3. コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力
4. 主体性と協調性
5. 異文化理解の柔軟性と日本人のアイデンティティ
6. 高い語学力
7. 議論する力
8. 地球規模の視点

これら８点を具体化するために、全生徒を対象とした「SGHスタディ」に加え、意欲の高い生徒を対象とする「SGHプログラム」も用意している。全生徒が必ずSGHの取り組みに参加する点も特徴的だ。

全生徒参加の「SGHスタディ」で グローバル・シチズンを育成

「SGHスタディ」は、グローバル・シチズン（地球市民）を育てるための取り組みで、１学年から３学年の前期まで行われる課題研究である。１学年では「研究のための基礎的な技能の修得」を目的として、「統計的なものの見方・考え方」「アカデミック・ライティング」など、11講座、計28時間を授業として実施している。2・3学年では、数名ずつのグループがそれぞれグローバルな課題を発見し、調査・研究・ディスカッションを行い、解決方法を提案・発表していく「課題研究」が行われる。ここでは大きく３つの分野を生徒に提示、各生徒が興味のあるテーマを自ら考え、近いテーマに興味を持つ生徒とグループをつくり、調査・研究を行う。テーマは自由度が高く、視点の面白いものが多数ある。３つの分野は、

- 第１分野：オリンピック・パラリンピックにおける諸問題（テーマ例：「シッティングバレーを広めよう」など）
- 第２分野：地球規模で考える生命・環境・災害（テーマ例：「文京区ハザードマップを改善せよ！」など）
- 第３分野：グローバル化と政治・経済・外交（テーマ例：「コンビニから考える日本の進路」など）

である。

筑波大学は伝統的に“オリンピック教育”の研究を行っているので、その特色を第１分野に生かしている。さらに、課題研究と並行し、グローバルに活躍している識者を招いての講演会なども「SGHスタディ」の中で実施している。

グローバル・リーダーの育成を 目標とする「SGHプログラム」

参加希望の生徒を対象とする「SGHプログラム」では、海外との派遣交流や相互交流を行う。例えば、

- アジア太平洋リーダーズサミット（シンガポールで開催される高校生の国際会議に毎年３名の生徒を派遣）
- 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（世界各国の高校生との国際交流。近代オリンピックについての講義、スポーツ交流や芸術プログラムなどを通して学ぶ。生徒３名参加。於：スロバキア）
- 国際学術シンポジウム（韓国で行われたインターナショナル・シンポジウムに代表生徒３名が参加）
- 日中高校生交流（中国の高校生と相互交流。小大使としての外交活動もある）
- カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学サマープログラム（カナダのUBCで行われる大学体験プログラム。2、３年生の代表生徒23名が参加）
- シンガポール短期留学交流（シンガポールの高校と相互留学。生徒６名参加）

などが実施されている。

SGHプログラムは増やす傾向にあり、今夏からカナダ・プリンスエドワード島の大学のサマープログラムも加わった。SGHプログラムへの参加希望者が多いため、高校側はプログラムを増やす努力を続けている。熊田先生は「SGHスタディを通して生徒全員に『グローバルな世界での市民になってほしい』という思いがあります。そしてSGHプログラムでは、地球市民の中でも特に『リーダーになれる人間を育てたい』と考えています」と語っている。

未来に向けて、課題研究活動を 継続していくことが重要である

SGH指定を受けて変化したことは、以前は各教科の中で行っていた課題研究を「SGHスタディ」というカリキュラムに組み上げたことだ。「SGHスタディ」では、最終的にアカデミック・ライティングの講座を組み入れた。これも以前は各授業で行っていたことだ。また、同校は教科の専門性が高い教員が集まっている学校だが、「SGHの活動によって、専門教科以外の視野が広がるきっかけになっているかもしれません」と熊田先生。「SGHに応募する際、全教員がSGHに関わることに合意し、採択後、全教員が活動に関わっているのです」と続ける。約40名の教員のうち国際部の教員が「SGHプログラム」を担当し、それ以外の教員は必ず「SGHスタディ」の学習指導やテーマ指導として活動に関わる。全教員が参加することで、教員サイドにもプラスの視点が生まれているようだ。

熊田先生は、「課題研究で大学生でも難しいのは、オリジナルのデータを収集することですが、予想よりも多くの生徒が街に出てインタビューをしたり、学外の人にアンケートを依頼したり、企業見学を行ったりしてデータを集めていました。しっかりとフィールドワークをしている、という印象を持てたことがうれしかったです」と目を細める。そして、「長期的に見ると、このような課題研究の必要性は高まりこそすれ、低くなることはないと思うので、SGHスタディなどの活動を継続していくことが必要だと思います」と、伝統的な教育活動をSGHとしての活動として発展させていくことの重要性を強調した。

SGH担当・政経科　熊田亘先生

SGHプログラム：アジア太平洋リーダーズサミットでの日本チームの発表

SGHプログラム参加者が、学内でその成果を発表する

SGHスタディ：研究手順を話し合う

SGHスタディ：情報教室を活用する

第９回　千葉大学

新設・国際教養学部をモデルに 未来にヒットする新教育を推進

国立大学法人　千葉大学　渡邉 誠　副学長・理事（教育・国際担当）

千葉大学は、2014 年に「千葉大学改革構想」を策定し、「技術・医療・起業」の高度なプロフェッショナル人材の輩出を目標に据えた。その中で、スーパーグローバル大学に選定され、「未来のグローバルな人材」＝「人間力のある人材」と捉え、「人間力を身に付けたグローバル人材を育成」するために、「グローバル千葉大学の新生-Rising Chiba University-」という構想名の下、新組織を創設。オリジナリティに富んだ「4つの改革」＋「3つの力」＋「4つの独自目標」を掲げ、ダイナミックにグローバル化を推進している。

渡邉 誠　副学長・理事（教育・国際担当）

4つの改革＋3つの力＋4つの目標 明快なビジョンの下、革新を進める

千葉大学は、「4つの改革」＋「3つの力」＋「4つの独自目標」により、“ 世界トップクラスのグローバルキャンパスの実現”を目指している。

「4つの改革」とは、「ガバナンス改革」「学修制度改革」「プログラム改革」「グローバル・ネットワーク改革」である。グローバル化を推進するうえでの“ ガバナンス”や“ 制度”を見直し、構築する。その中にある“プログラム”を、グローバル人材を育成するために改革。さらに、2017年オープン予定の海外キャンパスや世界有数の大学コンソーシアムとのアライアンス交流など、“ネットワーク”を拡大している。特に、“ガバナンス改革”には、改革の大きなカギとなる、新学部「国際教養学部の設置」が含まれる。

「3つの力」とは、「俯瞰力」＋「発見力」＋「実践力」であり、千葉大学ではこれを“人間力育成のための3つの力”と捉えている。

そして、「4つの独自目標」が「753＋1（シチゴサン タス イチ）計画」だ。「7」は、700科目に及ぶ英語による授業を実施するという目標（外国人教員の比率を上げるなどの努力目標含む）。「5」は、入学定員の50%(1,200人）の学生を海外に送り出す計画。これは「12万人を海外に送り出す」という国の目標に対して、うち1%を確実に千葉大学から送り出すことになる。「3」は、年間3,000人の留学生を受け入れるという目標だ。そして「1」は、入学定員の10%(240人）を、留学専用の飛び入学や国際バカロレア入試、海外での入試など、多様な入試で選抜する。子供の成長を祈願する「七五三」のように、学生の成長への願いを込めた計画である。

学生の海外派遣者数の高い実績が「753＋1計画」の達成を後押しする

「753＋1計画」を達成するためのベースとして、すでに約400の海外大学・機関と協定を結んでおり、協定校への日本人学生の海外派遣数は、国立大学では4年連続で1位を獲得している（日本学生支援機構2011〜2014年度調べ）。そこには「skipwiseプログラム」というグローバル人材育成プログラムにより、グローバル人材を目指す学生を手厚くサポートし、海外へ飛び立つチャンスを広げてきた施策がある。

このプログラムは、仮想副専攻として「国際日本学」を設け、その中で、グローバル社会に対応するために必要な知識や技能、経験を培い、自国と外国の両方の知識からなる高度な教養を身に付けた真のグローバル人材を育成するものである。具体的には、ゲートウェイ（グループワークで日本についての基礎知識を学ぶ）、イングリッシュコミュニケーション（英語でのコミュニケーション力を高める授業）、留学（海外初心者向けの「グローバル・フィールド・ワーク」や海外協定校の学生と協働で学ぶ「グローバル・スタディ・プログラム」など）、国際体験（国内外でのグローバルインターンシップやグローバルボランティア）という4段階の活動で構成されている。これらの活動により学生の意識・意欲を高め、海外派遣数を押し上げているといえるだろう。渡邉副学長は学生たちに「まずはとにかく海外に行ってみること。海外留学は自分に関係ない、と思っている学生でも、海外に出ると必ず新しい発見ができるのだから」とエールを送る。

「753＋1計画」を推進して3年目となり、新学部ができたことも相まって「感覚的には70%くらい達成できたと考えています」と、渡邉副学長は語った。

国際教養学部で効果の出た試みを他学部でも推進し、目標に近づける

2016年4月に新設された国際教養学部だけは学長直轄とされ、学部長の選定方法も、運営メンバーも、教員構成も全て他学部と異なっている。「ガバナンス、組織自体が今までの“部局”という考え方と全然違います。要は、大学がやりたいことを即実践し、今までであった不必要な制度や教育は止めます。まず、この学部でやってみよう、というパイロット学部の位置付けなのです」と渡邉副学長は述べる。つまり、この学部で千葉大学が目指す「4つの改革」＋「3つの力」＋「4つの独自目標」を推進するための教育方法を実践してみて、効果的なものを他学部にフィードバックし、いずれ全学部を含めて“ 世界トップクラスのグローバルキャンパス”にするという壮大なビジョンが背景にあるのだ。

国際教養学部の最大の特徴は、「世界を舞台にした“ 文理混合”の課題解決型教育」だ。グローバルイシュー（世界が抱える問題）について、日本の文化・技術を用いて独自の視点から解決する能力を身に付けることを目標とする。現代社会の複雑な課題は、既存の学問分野単独での解決は困難であることが多い。そこで、この学部では、従来の学部のように最初から学問分野を決めるのではなく、課題認識からスタートし、その解決のための知識を選択・統合し、解決能力を育む“レイトスペシャライゼーション”教育を実践する。

「世界で戦っていくには日本の強みである“サイエンス”や“先端技術”を実際にどのように応用していくか、という科学的知識も備えた人材の育成が重要です。そして、海外へ出た時、しっかりと日本について英語で説明できることの必要性も重視しています。ですから、いわゆる文系的イメージの国際教養学部ではなく、文系と理系がブレンドされた、まったく新しい学部なのです」

学生は学修・研究を進めながら、自分に一番ふさわしい文理バランスをデザインしていく。ただし、文系のみ、理系のみという偏った比率で学ぶことは許されない。そのため、教員とSULA（Super University Learning Administrator）と呼ばれる学修支援専門職が相談に乗りながら、学生の科目履修をサポートするテーラーメード型の制度を組み上げた。さらに、卒業までに最低1回の海外留学を必須としている。

俯瞰力・発見力・実践力の育成を体現する国際教養学部の教育

国際教養学部では、千葉大学が掲げる“人間力育成のための3つの力”が体現されている。渡邉副学長は、「まず、プログラム自体が文理のあらゆる物事を俯瞰できるように組まれています。その教育の中で“ 俯瞰力”を身に付け、それぞれのメジャーで課題を見つけながら、“ 発見力” を磨いていきます。そして、アクティブ・ラーニングによる文理ブレンドの課題解決力、海外留学やインターンシップ、ボランティアなどのソーシャルラーニングでの実体験による課題解決力を併せて、最終的に“ 実践力”を磨きます」と、自信を見せる。現に、国際教養学部の1期生は学びへのモチベーションが高いという。「学生から質問も積極的に上がり、もっと英語での授業を増やしてほしいなどといったリクエストがくるので、教えている教員たちが、教えることがすごく楽しいと感じているようです」と渡邉副学長は喜びの表情を浮かべる。

入学試験の面から見ても、国際教養学部では入学定員90名のうち、10名については「特色型入試（個別学力検査を課さない、小論文＋英語による面接）」により受入れを行っている。つまり、この学部では10%以上がすでに多様な入試で入学しており、千葉大学「4つの独自目標」の「1」である、「多様な入試で入学定員の10%を選抜」をすでに達成しているのだ。2017年度はAO入試も導入し、約20%の学生を多様な入試で選抜する予定だという。

このように、新しい試みを次々と取り入れている国際教養学部の最終的な目標は、国内ではなかなか難しいダブルメジャーを学生に取得させていくような教育を行っていくことだ。渡邉副学長は、「海外の大学では可能なダブルメジャーを、日本でもできるように国の制度を変えていく、その働き掛けに国際教養学部のプログラムがつながればうれしいですね」と、目を輝かせた。

Top Global University

スーパーグローバル大学（SGU）

大学の国際化が進めば 大学入試や高校教育も変わっていく

〔連載〕

思考力・判断力・表現力を育む

ライティング活動のために 第3回

Writing

2020年から次期学習指導要領の改訂や新テストの実施を控え、
生徒が自分の言葉で自分の考えを発信する力を高める指導が求められています。
4技能を統合した言語活動により、どのようにライティング活動へ結び付けるのか、
また、生徒が書いたものをどのように評価すればよいのか。
大井恭子先生が「生徒の表現力を高める評価方法」についてアドバイスを送ります。

パラグラフ・ライティングに取り組む際、一番恰好な話題は“My Dream”(= What I want to be in the future)かもしれません。これは、中・高生にとって身近な話題ですし、このことを考えさせるというのはキャリアデザイン教育の一部ともなります。そして、多くの教科書でも、この話題でのパラグラフ・ライティングを取り扱っているかと思います。

しかし、ただ単に①パラグラフの構造を教え、②First, Second などの「つなぎことば」を教えて、すぐに、「さあ、書きなさい」としただけでは、生徒たちは「まとまった文章を書く」というところにはなかなか行き着かないのではないでしょうか。

例えば、漠然と将来の夢は「サッカー選手になること」と、”I want to be a soccer player.”いうところまで書いたとしても、そこで筆が止まってしまっている生徒が多くいるのではないでしょうか？ そうした生徒たちにどのようにして考えを深めさせるかということを今回は考えます。

ここで登場するが「キュー(Cue)・カード」です。これは、「アイディア発見のための発問(heuristic questions)」の一環であり、「思考促進法(procedural facilitation)」の1つです。

今回のトピックに関しては、具体的には次のような質問を次々にしていくことができます。Q1. 将来なってみたい職業はありますか？/ Q2. その職業の人はどんなことをしていますか？/ Q3. その職業に関して、あこがれの人物をあげてみよう！/ Q4. その人はどんなところが素晴らしいですか？ あなたはどんなところに憧れていますか？/ Q5. どうしてその職業についてみたいのか、理由を考えてみよう。/ Q6. 将来の夢のために、これからすること、がんばることは何ですか？―― これらの「キュー」とともに、関連する語彙や表現もword box的に入れてあげると、生徒たちの英文作りも促進されます。

こうした「キュー」を用いて、自問自答することにより、改善が図られたサンプルを示します。最初は25語だったものが「キュー」に導かれて考えることで内容が深まり、58語へと語数が増えました。

In the future, I want to be a nursery school teacher. I like to play with the children. I think that child is very cute!! (25)

その職業の人はどんなことをしていますか？

どうしてその職業に就きたいのか、理由を考えてみよう！

I want to be a nursery school teacher. Nursery school teacher reads book, sings song, and plays with the children. I like child. Also I like to play with children. I think that nursery school teacher is very exciting. But I can't play the piano and I don't like to sing song. I will try to play the piano. (58)

※この時点ではまだ文法的正確さに関しては直しを入れてありません。

将来の夢のために、これからすること、がんばることはなんですか？

このように、まずは内容を深める指導をし、そのためには総語数を目標に加え、「50語以上書けたら○点」というように、語数も評価の1つに加えておくと、生徒たちの書く意欲が増すと思われます。いずれの場合でも、どのように評価するかという評価の基準はライティング・タスクの前に提示し、それを目標に書かせる指導としたいと考えます。

大井恭子（おおい・きょうこ）

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英文学科卒、New York 州立大学 Stony Brook 校大学院言語学科博士課程修了。博士（外国語教授法）。専門は英語教育、応用言語学。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築を目指している。

〔連載〕

柴原智幸先生の プレゼンテーション講座

第3回

「発信するために大切なインプット」

見本を示してまずはマネしてみる

極論してしまえば、発信するために必要なインプットとは
・良い発信の見本に触れさせ、どこが良かったのかを抽出する
・良い発信のために効果的な語句や機材に慣れさせる
という2点になるかと思います。一言でまとめれば、プレゼンテーション（以下プレゼン）の学習とは、「お手本から抽出した良い点を、自分でも生かして発信する練習をする」ということになるのではないでしょうか。

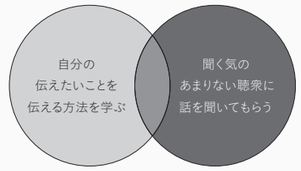
良い発信の見本としては、私は「上手な授業」がまず挙げられると思います。授業も、聞き手を巻き込んでメッセージを届ける「プレゼン」にほかならないと思うのです。授業中に生徒が寝てしまったり、内職をしていたりするのであれば、授業そのものを改善することが、プレゼンを教える方法の開発や改善につながるはずです。

私もさまざまな授業改善の本を読んで、自分の授業に取り入れていますが、何かを身に付けさせるやり方で一番手っ取り早いのは、見本を示して「こうすればいいんだよ。まずはマネしてごらん」ということです。

本質を見誤らない

プレゼンと言うと、よくTEDがお手本に挙げられますが、確かに参考になる点は多いですね。しかし、あのようなプレゼンをそっくりそのままコピーしたようなものが良いとは、個人的には思いません。「1＋1＝2」と言えば済むものを、ロックバンドのコンサートのように派手派手しく伝える語りがあまりによく目につく、という印象があります。私は学生たちに「あれは味付けが濃すぎる」と言うことが多いです。要は、「聞く気がない人を振り向かせるためのパフォーマンス的要素が多すぎる」ということなのです。

会社でのプレゼンもそうなのかもしれませんが、「聞く気のあまりない聴衆」を前提としたプレゼンがあまりに多いような気がしていて、そのやり方をメインに教えることが、果たして教育的に効果があるのかどうか、とも思うのですね。「自分の伝えたいことを伝える方法を学ぶ」ということと、「聞く気のあまりない聴衆に、話を聞いてもらう」ことは、ベン図（下図）のように重なる部分はあるものの、完全にイコールではないはずです。昨今のプレゼン教育は、あまりに後者に重点を置き過ぎなのでは、とも思います。



本当に伝えるべきことはマイク一本あれば、伝えられます。声が届くなら、マイクすら要りません。授業の話に戻りますが、授業にパワーポイントを使うのは非常に良いことだと思いますけれども、パワーポイントが動かなくなったら、即、授業が崩壊してしまうようでは、良いプレゼンのお手本にはなれていないと思います。プレゼンを教えるとなったら、まずパワーポイントのスライド作成方法を……というのも、本質を見誤っているのではないか、と思うのです。

ですから、TEDだけではなく、講演会に足を運んだり、CourseraやiTunes Uなどで大学の授業を視聴したりすることも、教師・生徒双方に効果的です。先生が見て良いと思ったものを説明しながら生徒に見せてあげる、というのも立派な「プレゼン」であり、「発信するために大切なインプット」だと思いますよ。

可能であれば、発信するためのスキルだけではなく、受信のためのスキル、つまり「いかにして良い聞き手になるのか」「プレゼンに対してどのように向き合えばよいのか」という部分も指導できたらよいですね。

柴原智幸（しばはら・ともゆき）

神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師。同時通訳者。NHKラジオ『攻略！英語リスニング』講師。上智大学外国語学部英語学科卒。イギリス・バース大学の通訳翻訳コース修士課程修了後、ロンドンのBBCに入社。帰国後はNHKの放送通訳や「ディスカバリーチャンネル」などでの吹き替え用映像翻訳、通訳養成学校での指導を行う。主な著書に『攻略！英語リスニング 徹底シャドウイングでマスター！長文リスニング』（NHK出版）、『オバマの英語 徹底トレーニングブック』（アルク）など。

〔連載〕第3回

MASUMI先生の夢中になれる英語

Game & Activity

もっと英語が好きになるアクティビティ

何か英語のフレーズを教えるときに大切なのは、最初の出会いです。
夢中になって言いたくなる状況を設定してあげれば、
子供たちは“言わされる英語”を覚えるのではなく、
“心から言いたい英語”を覚えていきます。
夢中になって言った英語こそ、“その子の言葉”としてずっと残っていきます。
今回は「Don't を使った表現の導入の仕方」をご紹介します。
いろいろな表現を使って、同じような導入方法ができます。
一例として参考にしてみてください。

MASUMI先生の紹介したゲームが見られます

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
（アプリの詳細は表紙の裏面へ）

1 この動作を英語で言うと？

アクションをしながら、次の４つの単語を表現してみましょう。
まず、「こんな単語があるんだ」「こんな意味なんだ」ということを、
動作を付けて子供たちに示します。

sit / open / eat / drink

動作を示す単語は、ほかにもたくさんありますね。今回は、動作がはっきりしていて分かりやすく、状況設定をしやすい、これら４つの単語に限定してみました。

2 Don't の意味は？

“してはいけないこと”をしながら、子供たちからDon't...と言いたくなる気持ちを引き出します。

Don't sit down.

先生が、汚れた椅子に座ろうとします。それを見た子供たちから…
子供たち：Don't sit down!

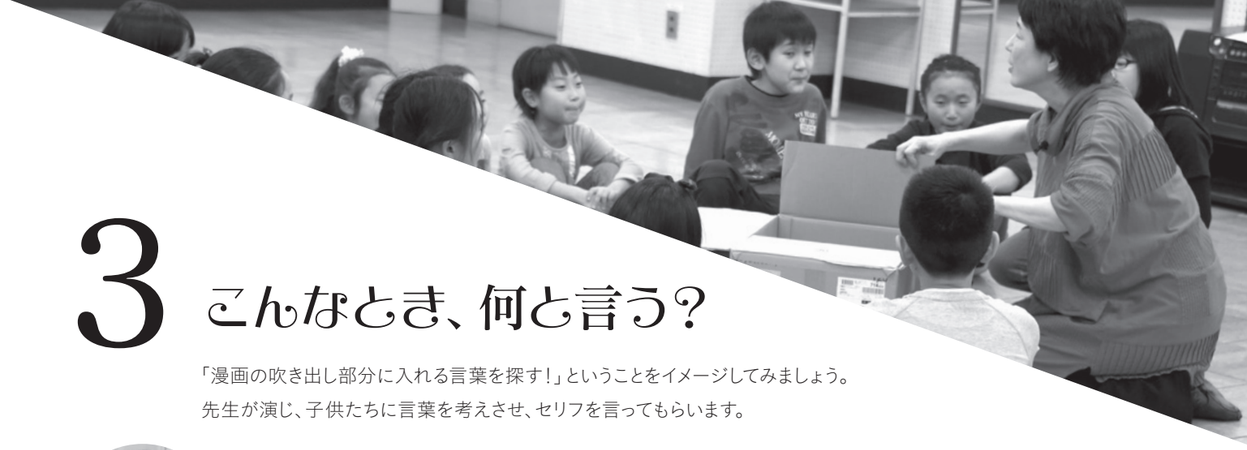
Don't open it.

箱の中には幽霊（ghost）や悪魔（devil）が入っていると説明します。
先生がその箱を開けようとすると…
子供たち：Don't open it!

Don't eat it.

鼻をかんだティシューをまるめて、なぜか食べようとする先生に…
子供たち：Don't eat it!

ghostやdevilといった英語を子供たちが分からない場合は、意味を日本語で添えながら、子供たちがその状況をイメージできるようにしましょう。



3 こんなとき、何と言う？

「漫画の吹き出し部分に入れる言葉を探す！」ということをイメージしてみましょう。
先生が演じ、子供たちに言葉を考えさせ、セリフを言ってもらいます。

Don't sit down.

ペンキ屋さん（先生）が椅子にペンキを塗ります。
そこへお年寄り（先生）がやってきて、その椅子に座ろうとします。すると…
子供たち：Don't sit down!

Don't open it.

乙姫さま（先生）が浦島太郎に玉手箱を渡します。その際、はっきりと“Don't open it.”と伝えます。でも、家に着いた浦島太郎（先生）は、どうしてもその箱が開けたくてたまりません。開けようとしたところで…
子供たち：Don't open it!

Don't eat it.

毒リンゴを手にした魔女（先生）が現れます。何も知らずに、そのリンゴを食べようとする白雪姫（先生）。その様子を見て…
子供たち：Don't eat it!

Don't drink it.

フック船長（先生）がピーターパンの飲み物に、こっそり毒を入れます。
“Har Har Har”と帰っていくフック船長。そうとは知らずに、それを飲もうとするピーターパン（先生）。すると…
子供たち：Don't drink it!!!

耳が遠くて聞こえづらいふりをすると、子供たちは必死に伝えようとします。より多くの子供たちが叫ぶまで、聞こえないふりをしてみましょう。

「これはウェンディーからもらった飲み物だから、絶対に飲みたいんだ！」という演技をすると、子供たちのモチベーションがより高まり、大きな声で叫んでくれるかも知れません。

今回は先生の演技力がちょっと必要です…と言われると、「あ〜、私は演技が苦手だからできない〜っ！」と思われる先生もいらっしゃるかもしれません。でも、迫真の演技を求めているのではありません。ポイントは「子供たちの言いたい気持ちをより強めるために、先生がそれとは逆のことを、よりリアルに演じること」です。例えば、飲んではいけないものを、より飲みたい!!と思うこと。そして、子供たちが本気で止めてくれたらそれをやめる。飲みたい気持ちが勝てば飲んでしまう、といったように、その時の子供たちの状況に合わせます。それこそが「真のコミュニケーション」となるのです。お互いに伝えたいこと、やりたいことに向かう。英語を言うときにそんな気持ちがあればワクワクします。ドキドキします。夢中になります。やらされたり、覚えさせられたりする英語ほど面白くなく、すぐに忘れてしまうものです。気持ちが動いてこそ、言葉が生きてくるのです。生き生きと英語を発する子供たちの様子を見れば、先生もきっと心が動くはずです。頭だけでなく心も動くクラス展開に、ぜひ挑戦してみてください。

小口 真澄（こぐち・ますみ）
“夢中になるから英語が話せる”英語芸術学校MARBLES主宰。聖セシリア女子中学校講師、新潟県魚沼市主催 魚沼産☆夢ひかり「キッズミュージカルプロジェクト」演出。全国の小学校にて英語劇ワークショップ「英語DEドラマ@学校」を行う。企業研修に英語劇を取り入れビジネスマンたちとも英語ミュージカルを創る。
Marblesによる児童英語指導法などのワークショップ情報はこちらから。
http://marbles1008.net/m-5-ws-schedule.html#0731

TSUNAGARIのある英語教育を　山口から発信

第66回 全英連山口大会 実行委員会メンバー座談会

11月11日、12日の2日間にわたり、「第66回 全英連山口大会」が山口市内で開催される。大会実行委員会が現在どのような準備を進めているのか、そして、山口大会の見どころは何か。実行委員会メンバーに大いに語り合っていただいた。(文中敬称略：取材は2016年8月)

大会コンセプトに込めた思い

藤田　今後は、教育において「つながり」が重要になると思います。次期学習指導要領では、小学校で英語が教科化され、これまで以上に小・中の連携（つながり）が必要になります。今回の大会実行委員会は中学校の教員を中心に組織していますが、中学校は小学校と高等学校をつなぐ役割を意識しなければという思いもあります。さらに、英語教員と生徒、生徒と生徒、生徒と教材をつなぐことも大切だと強く感じます。授業では、生徒の言語活動によって生徒同士がつながり、英語の4技能がつながります。「つながり」にはそうした意味合いもあります。

山本　そして、授業実演や発表を通して、実演者や発表者と指導助言者とのつながりも深まっています。

藤田　TSUNAGARIという言葉が含む意味はとても広いですよね。

山本　最終的には、大会にご参加くださる方々、つまり英語教育に携わる者同士のつながりも強まればと思います。これまで出会ったことのない方々が出会い、英語教育や児童生徒に関わる人たちが連携していくことで、お互いの資質を高め合っていくことができたらいいですね。懇親会では、山口県の食材や地酒もご用意していますので、ぜひご参加いただき、親交を深めていただきたいものです。

山口大会に期待すること

藤田　山口県としては初めての全英連大会開催となり、この大会は山口県中学校英語教育研究大会を兼ねています。4年に1回開催している山口県の中学校の英語教員対象の大会ですが、ちょうどその開催年にあたったのです。高知県が全英連大会を開催したのを機に四国の英語教育が大きく変わったと聞いています。私たちも山口県の英語教育が前進すると信じて、がんばってきました。

山根　例えば、バックワードデザインやCAN-DOリストという考え方は決して新しいものではありませんが、県内の中学校、高等学校ではまだ十分浸透していないようです。シラバスについても、学習者にとって本当に学びの指針となるものが作られているか。国際化の進展を考えると、生徒たちは社会に出てから英語を使う場面に遭遇することが多くなります。大学受験が終わったら英語学習は終わりではなく、自律した学習者として学び続ける生徒を育てていくべきだと思うのです。だからこそ、生徒の言語活動中心の授業をつくり、生徒に本当の英語力を付けていかなければなりません。

藤田　次期学習指導要領では、中学校でも「英語で授業を行う」ことになります。文部科学省の平木裕教科調査官がおっしゃるように、「英語で授業を行うということは、日本語を使ってはいけないということではない」のですよね。

山根　そうですね。教師が英語を流暢に話したところで、それは授業ではありません。生徒にいかに英語を使って活動させるかということです。

藤田　平木教科調査官は、生徒に英語を使わせるにも、その場で考えて発表する即興力を育む場面を設定してほしいとおっしゃっています。今回の大会では、県立山口高等学校の冨山貴之先生がそのような授業を実演します。中学校の授業実演を行う周南市立住吉中学校の野坂良太先生は、帯活動を多く入れています。大会当日は、野坂先生が昨年から取り組んできた実践の発表となるでしょう。中・高ともに、生徒が積極的に英語を使って活動する場面が多く見られると思います。当日は、生徒も教師も緊張し、沈黙する場面もあるかもしれません。でも、その沈黙も大切だと思います。用意された原稿を読むのとは違う自然な姿ですからね。

山本　日頃の授業から、即興力を高める場面を設定した授業をしていなければ、生徒の発言をその場で求めるのは難しいですよね。

「英語の授業は英語で行う」ことの意味

藤田　中学校では何年も前から「授業は英語で行うこと」を実践しています。教師は不必要な日本語を使わないようにするという意識は持っていると思います。

尾羽根　クラスルームイングリッシュを使うようにしていますよね。

藤田　私は小学校にも勤務した経験がありますが、小学校の先生方が外国語活動の授業を一生懸命に英語で進めていらっしゃる姿は印象的です。

山根　私は若い頃からまったく日本語を使わない授業もしてきました。「外国事情」という学校設定科目では、大学の教養レベルのテキストを使って、一切日本語を使わずに授業をしていました。教える側も学ぶ側も楽しんでいましたね。「オーラルコミュニケーション」の時も日本語は使いませんでした。1年間の授業を終えたとき、1年生の生徒たちに英語4技能のどの力が一番伸びたかと尋ねると、「聞くこと」だと言いました。「ALTや先生の話す英語が聞き取れる」と言うんです。いろいろな指導の仕方はあると思いますが、目の前の生徒の状況に合わせて、適切な英語を使って授業をしていくのがよいのでしょうね。

藤田　私自身も学生時代に、英語の授業は英語で行うものだと教わり、それが自然なことだと思っていました。今回の大会を機に、県内外の先生方が、英語で授業を行うことの必要性を感じていただければいいと思います。

尾羽根　自律した学習者を育てるためには、今、求められているアクティブ・ラーニングを進めていく必要がありますね。

教員がまず アクティブ・ラーナーであるべき

山本　そのアクティブ・ラーニングを進めるには、まず教員がアクティブ・ラーナーである必要があります。今回の大会は、そうした意識を参加者の皆さんに持っていただくための研修会であるとも言えます。

藤田　そうですね、まずは教員から意識を変えなければ。

山本　ですから、アクティブ・ラーナーになるために、まずは「大会に参加する」というアクションを起こすことから始めましょう。

藤田　授業実演や分科会発表をする先生方は中四国地域のトップランナーです。そうした方々の発表を一人でも多くの方に見ていただき、そこまで追いつき、追い越せといったモチベーションを持っていただければ、英語教育の底上げになるのではないでしょうか。

山根　大会に参加された方々が目を見開くような“気付き”がある場をつくることができればと思います。そして、モチベーションを高めていただくことができればうれしい限りです。授業実演や分科会発表を通じて、明日からの授業に1つでも何か取り入れてみようと感じていただきたいものです。

山本　大会は打ち上げ花火ではありません。きれいだったね、良かったねで終わらせてはならないのです。大会を通じて蒔いた種が根を生やし、実りを迎えなければならないのですから。

尾羽根　そうですね。山口大会はゴールではなく、これからの山口県の新しい英語教育の始まりです。これをスタート地点として、異校種間連携も含め、県レベルでTSUNAGARIのある英語教育に取り組んでいきたいと思います。どうぞご期待ください。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

大会実行委員会 委員長
尾羽根 公介 先生
（山口市立仁保中学校 校長）

大会実行委員会 副委員長
山根 敬二 先生
（山口県立厚狭高等学校 校長）

事務局長
山本 幸生 先生
（下関市立安岡中学校 校長）

研究発表部長
藤田 譲二 先生
（長門市立日置中学校 校長）

全英連
山口大会
に向けて

全英連大会の見どころの1つは、第1日の授業実演だ。学習指導要領に沿い、先行的な取り組みも交えた実践事例となる授業が実演される。山口大会では、小学校は事前に録画編集した授業の様子のビデオ発表、中学校と高等学校は生徒参加による実演となり、発表者が日頃からどのような授業を実践しているかを直接目にすることができる。大会を目前に控えた発表者たちに、研究テーマと取り組み、当日への意気込みを聞いた。
（取材は2016年8月当時）

なお、第2日には、山口県内をはじめ、中四国の英語教員による研究発表が分科会形式で行われる。小・中・高等学校におけるそれぞれの取り組みについて、日本語もしくは英語での発表となり、研究テーマに基づいた授業での実践例と課題、今後の展望などが説明され、参加者との活発な意見交換が期待される。明日からの授業づくりのヒントが散りばめられた発表の数々のなかから、参加者自身が日頃から抱えている課題解決の糸口を見つけることができる好機となるだろう。

山口大会への参加申し込みは10月28日まで、大会ウェブサイトにて受け付けている。大会の開催概要、授業実演および分科会発表のテーマなどの詳細は、山口大会ホームページへ。

第66回　全英連山口大会　検索

https://conv.toptour.co.jp/2016/yamaguchienglish2016/

小学校 ビデオ発表

光市立室積小学校　山田 浩史 先生
発表学年　6年生

This is our school.

<当日の発表内容について>
本校は文部科学省の「英語教育強化地域拠点事業」の地域拠点校として、次期学習指導要領を見据えて5、6年生での英語の教科化への取り組みや、外国語活動実施学年の早期化などを研究しています。授業は本校独自のカリキュラムで進めており、これまでにプロジェクト1で自分自身について紹介し、プロジェクト2では自分が住む地域について紹介してきました。当日はプロジェクト3を発表します。タブレットを使って、自分の学校を紹介する動画を撮影し、オーストラリアの小学生と交流する活動です。児童が撮影した教室や体育館、校庭、プールなどの映像に説明の文字も添えて日本の学校を紹介する予定です。撮影をしながら、その場で“How about your school？”“What subjects do you like？”などと投げ掛けていく様子も同時に撮影できたらと思います。また、教科化への取り組みとして、書く活動も取り入れます。校内の紹介をする際には、単に話し言葉だけで伝えるのではなく、相手への分かりやすさも考慮して、児童自身が書いた文字でも表示することを考えています。

<今後の展望>
発表の機会をいただき、校内外の多くの先生方とのつながりができたのは、私にとっても、児童にとっても、素晴らしいチャンスでした。オーストラリアの小学生との交流を通じて、英語を話せれば、世界の人とつながることができると実感できます。今後も留学生を教室に招くなど、リアルなコミュニケーション活動の場を設定し、つながりを広げていきたいです。

中学校 授業実演

周南市立住吉中学校　野坂 良太 先生
発表学年　2年生

アクティブ・ラーニングをベースとした学習指導の工夫
〜『聞くこと・話すこと』の領域を重視した取組〜

<当日の発表内容について>
これまでの授業中の学習活動を分析すると、「アイコンタクトの不足」「発展的な会話が見られない」「機械的な返答や単語でのやりとり」などの点が観察されました。このような生徒の状況は、インプットからアウトプットへの習得過程におけるインテイク活動の不十分さに起因すると考えました。したがって、指導では既習項目を継続的に習得するためのインタラクティブな活動、生徒間の協働したコミュニケーション活動を通して指導方法の改善を行い、生徒のアウトプットの向上的変容を試みました。この2年間で、バックワード・デザイン（到達目標からの逆算）に基づく指導計画、総合的な活動（ListeningからSpeaking）を意識した帯活動、タスク活動（協働学習）の授業実践を行ってきました。授業実演では、あらかじめ原稿を用意するのではなく、自分たちが紹介する山口県についてのイラストやキーワードでマッピングされたプレゼンマップを使用し、生徒同士が山口県の魅力について語り合う活動をします。その際に、非言語的コミュニケーションの使用や相手に対する質問、もっと知りたいことを相手に求める対話活動を促したいと思います。

<今後の展望>
勤務校の地域は小・中連携が盛んですが、中・高連携はあまり進んでいません。高校の先生と授業を見合う機会もありますが、「最終的には大学入試を意識した指導になりがち」だとよく聞きます。高校の先生方には、今後も中学校の授業を見ていただき、一緒に授業をすることができたら、もっと面白い英語の授業をつくることができるのではないかと思います。

高等学校 授業実演

山口県立山口高等学校 冨山 貴之 先生
発表学年　2年生（理数科）

プロジェクト
ー 教科書の内容に関する調べ学習とプレゼンテーション

<当日の発表内容について>
英語で情報を発信し、質疑応答ができる力が企業や大学で求められてきています。そこで「高校卒業までに、自分の意見や調べたことを英語で発信し、質疑応答を通して内容を深めていく力を付けること」を目標とし、効果的な授業のあり方を模索してきました。その目標に向けて、バックワードデザインに基づき、1年生からさまざまな言語活動をさせています。1年生ではOne-minute SpeechやShow & Tell、2年生では生徒に先生役をさせる活動などを取り入れ、人前で英語で話す力を身に付けてきました。また、適宜、ミニディベートやミニディスカッションなども行っています。今回実演する「プロジェクト」は、4、5人一組のグループでタブレットを使い、教科書の題材に関する調べ学習を行い発表します。「プロジェクト」は3年間で3回行います。今回ステージで発表する2年生は、すでに1年生の時に1回経験しています。2年生では年度末にもう1回取り組む予定です。プレゼンを聞く生徒たちはメモを取り、ペアで感想や意見を交換し、プレゼンターにコメントを書く活動へとつなげていきます。

<今後の展望>
私が英語に興味を持ったきっかけは、英語の歌や映画への憧れでした。だからこそ、生徒たちにも授業を通じて英語を楽しみ、英語を好きになってほしいと思っています。今回の研究を通して、多くの先生方の授業実践を勉強させていただきました。今後も、多くの先生方と交流し、指導技術やノウハウを共有できればと思っています。

英語教授法を学び、異文化理解を深める

2016年度 英語教員海外研修をオーストラリアで実施

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）では、「英語教員の資質向上」への寄与を目的として、2003年度より毎夏、英語教員海外研修を行っている。今年度は公募によって選ばれた小・中・高等学校各12名の教員たちが、オーストラリア・ニューサウスウエールズ大学で16日間の研修に参加し、ホームステイを通じて異文化理解を深めた。英検協会からの随行員が見た研修の様子をレポートする。

教員としての資質を高める独自のカリキュラム

今年で14回目を迎えた英語教員海外研修。その目的は次の3つだ。①英語教授法に関する知識と実践の深化、②異文化に対する知識の向上、③教育者として主体的に学ぼうとする意識の定着――。これらを通じて、英語教員の資質向上を目指すものとしている。

そしてこの夏、公募制となって初めての英語教員海外研修が、オーストラリア大使館の協力のもと、7月30日～8月14日の16日間の日程で実施された。これまでは小・中・高で分かれて、イギリスやアメリカで研修を実施してきたが、今年度からは小・中・高等学校いずれもニューサウスウェールズ大学（UNSW）で研修を行った。また、今回の研修から、宿泊は1人1家庭のホームステイとし、現地の人々の生活を実体験してホストファミリーとの交流を深め、異文化に触れる機会を設けた。

今回の研修を実施するにあたっては、オーストラリア大使館とUNSW、英検協会の三者による度重なる議論によってカリキュラムが編成された。カリキュラムは学習指導要領に基づいており、指導技術の向上と英語力の向上を目的とする各校種別のプログラムと、小・中・高等学校合同のプログラムとなっている。全ての授業は英語で行われ、参加者たちは、児童生徒を主体とした言語活動中心の授業づくりのあり方について学びを深めた。また、ニューサウスウェールズの小・中・高等学校を訪問し、現地校の授業の様子も見学する機会も用意されていた。

参加者たちの意識の高さを講師陣が称賛

研修初日、小学校教員のなかには、英語のみで行われる授業に不安を感じた方もいたが、参加者同士がお互いに助け合い、教え合いながら、学んだ内容への理解を深めていった。また、授業内容で分からないことがあると、授業後に講師に分かるまで質問するなど、意欲的に学ぶ姿が見受けられた。

中・高等学校の英語教員たちからは、日頃の授業で抱えている課題を解決できる糸口を探ろうという姿勢が見られ、参加者同士で意見を出し合いながら、議論をぶつけ、共通点や妥協点を探ろうとしていた。そうしたなかで、互いの指導観の違いを知り、相手を受け入れ、自分の主張を伝えようとする場面もあった。

■スケジュール

7月30日　日本発
7月31日　シドニー着
8月1日～8月12日　研修（土・日は休暇）
8月13日　シドニー発
8月14日　日本着

指導にあたったUNSWの教授陣からは「参加者は皆、教員としての優れた資質を持っていた。小学校の先生方はとにかく英語力が高くどのような場面でも積極的に取り組む姿勢は素晴らしい。中・高等学校の先生方の英語力も非常に高く、英語を使って授業することが十分できる」と称賛された。また、ホームステイの受入れ先からも「異国での生活にも関わらず、明るく積極的に振る舞い、英語力はもちろん人間性にも優れていた」との声が聞かれた。

模擬授業を通じて参加者同士の絆が深まる

研修の最終目標は、最終日に行うグループごとの模擬授業である。参加者たちはグループに分かれ、研修プログラムで学んだ知識や技術を踏まえて、模擬授業を行うための授業案を作成する。研修期間中、参加者たちは授業が終わると、グループごとに集まり、児童生徒主体の授業をどのようにつくるべきかと夜遅くまで議論をして、授業案をまとめ上げていった。そうした活動が参加者同士の絆を深め、自己研鑽の場となっていたようだ。

16日間の研修を終えて参加者たちは、ハードなプログラムを成し遂げたことへの自信に満ち、「研修で学んだことを、明日からの授業にすぐに生かしていきたい」と授業改善への高い意欲を見せて、帰国の途に着いた。

■主なプログラムの内容

小・中・高等学校のプログラムはいずれも5つの要素から構成されている。

- Language Teaching Methodology（**LTM**）
- Language Analysis and input（**LAI**）
- Language Enhancement / Australian Studies（**LE / AS**）
- Practical Component（**PC**）
- Managing Teaching and Learning（**MTL**）Lower and Upper Secondary only
- Teaching Young Learners（**TYL**）Elementary only

［小学校］

LTM：Teaching pronunciation, Eliciting and drilling, Communicative Language Teaching, Using songs and chants, Teaching speaking skills, Teaching listening skills, Teaching vocabulary

LAI：Using determiners, Expressing the present, Using functional classroom English

LE / AS：Australian food, Australian geography, Australian art, Australian animals, At the beach, Waltzing Matilda

PC：Visit to NSW school, Lesson observation, Supervised Preparation in pairs for end of program microteaching, Microteaching

TYL：Children's characteristics as language learners, Using practice activities to consolidate children's language learning, Developing children's communication strategies, Selecting and using course books and supplementary materials, Scaffolding children's understanding and use of language

［中学校・高等学校］

LTM：Teaching speaking skills, Teaching pronunciation, Eliciting and drilling, Concept checking, Communicative Language Teaching, The PPP Paradigm, Using songs and chants, Teaching reading skills, Teaching writing skills, Teaching listening skills, Teaching vocabulary

LAI：Using determiners, Expressing the past, Revisiting form and function, Using functional classroom English, Expressing the future

LE / AS：Australian food, Australian art, Waltzing Matilda

PC：Visit to NSW school, Lesson observation, Supervised Preparation in pairs for end of program microteaching, Microteaching

MTL：Classroom management, Making the most of your JET/ALT's time, Dealing with learner errors

2015年度 英検 英語教員海外研修

帰国後の取り組み報告

公益財団法人 日本英語検定協会では、「英語教員の英語力や指導力、資質向上」を目的に、毎夏に英語教員を対象とした海外研修を実施している。
2015年度も中学校は米国・モンタナで、高等学校は英国・ケンブリッジで2週間の研修を行った。
参加者たちは、研修に参加するにあたり、どのような課題を持ち、研修で何を学び、その成果を現在どのように生かしているのか。
帰国後の取り組みをレポートする。

REPORT

中学校英語教員研修

生徒が自ら英語を使って表現する力を付けるために

米国
モンタナ州立大学

島根大学教育学部附属中学校　教諭　鎌田 真由美

課題

“話すことを書いてからでないと話せない”という思い込みから、脱却できないでいた

以前の授業では、例えばスピーチ活動の際には、「生徒が書いた原稿を教師が正確に添削し、生徒がそれを読む。ほかの生徒はただ聞く」という活動がほとんどでした。しかしそのやり方だけでは、間違えながらでも少しずつ英語を使えるようになるための機会を、生徒から奪っていたと思います。自分自身が、モンタナ研修のアクティブ・ラーニングのクラスで英語を使いながら、相手に伝えたいことを何とかして伝える感覚を味わい、これを日本の教室でも実現したいと感じました。

帰国後の変化

①その場で考えて発話する活動を工夫

人物を紹介する単元では、その人物に関するキーワード・メモをもとに話すことを目標としました。メモの作り方については、初めは教師が用意したメモをもとに教科書の内容をRetellingするなどの活動を通して指導しました。また、今後の予定について対話する単元では、Rotating Speakingを帯活動として取り入れ、放課後、週末、夏休みなど、テーマを変えながら行いました。毎回、初めは教師と数名の生徒のやり取りを見せることでヒントとしています。また、この活動においては、間違いがあっても直接は指摘せず、教師が自分の発話の中で言い直すことで生徒に気付かせるようにしました。

②相手意識のある単元のゴールを設定

学校生活を紹介する単元では、小学生に中学校生活についてプレゼンテーションすることを目標としました。その際、小学生が理解できているかを確認したり、その状況によって説明を補足したりすることで、一方的な発表にならないようにしました。また、海外からの手紙を読んで返事を書く単元では、実際にアメリカの中学生からもらった手紙に返事を書く活動を取り入れました。日本の食べ物や行事などについて、ただ単にローマ字で表しても伝わりません。そこで、アメリカの中学生が知らないであろう言葉には説明を付け加えることをポイントとしました。

③既習事項を試行錯誤して活用する活動を工夫

モンタナ研修のアクティブ・ラーニングのクラスでは、自分が表現したいことについて辞書を引いている暇はありませんでした。自分が今持っている語彙や表現を引っ張り出して組み合わせて使うしかないのです。私自身、授業での指示やTeacher Talkは、生徒の既習事項を駆使して表現することで、英語を使うモデルを示しています。生徒はよく「○○は何と言いますか」という質問をしてきますが、その場合にはすぐには答えず、知っている表現でどう言い換えられるか考えさせるようにしています。最近では生徒同士で、「県大会で優勝したいってどう言うの?」「島根でチャンピオンになりたいって言えばいいでしょ」などというやり取りもできるようになってきました。

今後の展望

4技能を統合的に活用したコミュニケーションを

モンタナ研修で私たちが最後に行ったInteractive Poster Speakingは、自分が読んだ内容についてほかの人に伝える活動でした。これは、発表者が1枚のポスターにキーワードや図で伝える内容をまとめ、それを見ながらゲストが質問するというものです。これまで、この活動をスピーチの練習に応用することができました。このような活動を積み重ね、3年生のゴールには私たちが体験したような活動ができることを目指したいと思っています。自分が読んだことや聞いたことをもとに意見交換する力を付けさせていきたいです。

REPORT

高等学校英語教員研修

生徒から答えを引き出し、生徒自身に気付きを与えられる教師でありたい

英国
ケンブリッジ大学

大分県立中津南高等学校　教諭　山﨑 裕子

課題

授業の手法とその効果に対する客観的評価への不安

生徒が主体的・意欲的に言語活動に取り組む授業をするにはどうすればよいのか、パフォーマンステストを含めた評価はどうあるべきか。日々の授業での悩みはたくさんありました。ケンブリッジ研修で強く感じたことの1つは、これまで自分がいかに正解や正確さを第一と考えていたか、ということです。コミュニケーションにおいては、正解か間違いかではなく、effectiveかineffectiveかに焦点が置かれるべきである、との言葉に深く納得しました。研修後は、大事なのは「英語を使用することの喜び」を感じさせ、「コミュニケーションは成功している」という体験を積ませることなのだという意識を持って、日々の授業に臨んでいます。

帰国後の変化

①コミュニケーションの必然性を作り出す

授業でしかできないことは何か。これまでの予習前提の授業を見直し、授業で行うのは予習の確認ではなく、その場で考え、聞き、読み、話し、書く活動であると思いました。そして、ペアやグループで行うからこそできる活動を考えて授業を組み立てるようになりました。例えば、ジグソーリーディング（長い英文をいくつかに分け、各自のパートを読み、説明する）や、Role Play（solar powerについてのレッスンで、一人が生徒会役員として本校も太陽光発電を利用すべきだ、もう一人は校長として太陽光発電を利用する必要はない、という立場で）など、一人一人が責任を持って取り組む状況をつくること、相手に伝えようとする意欲をかき立てることを意識して授業を組み立てるようにしています。

②言語活動の充実を目指して

パフォーマンステストを学期に何度も設けることは難しいのですが、授業でのパフォーマンスを増やすことは可能です。また、何時間もかけたプロジェクトも必要ですが、普段の授業でできる短時間、即興での活動を取り入れるようになりました。教科書のレッスン終了後にはそのテーマに沿ったプレゼンテーションやスピーチなど、自分の考えをまとめ、発表する機会を持つようにしています。

【例】
- ●帯活動：1-min talkや英検面接風ペアワーク
- ●ニュース番組を作る活動：Conflict Diamondsのレッスンでは、キャスターやレポーター、現地の人などの役割で本文の内容を伝えた。内容だけでなく、自分の思いも伝えるなど、生徒たちは意欲的に取り組んでいた。
- ●プレゼンテーション：日本の放置自転車を海外でbicycle ambulanceとして活用するという内容のレッスンでは、ペアでホワイトボードに絵を描き、自分たちならどのようなデザインをするのか、プレゼンテーションをした。

③学習者の学びを助けるための評価

研修での“Assessment is the process of evaluating how effectively learning is occurring.”という講師の言葉が印象深く残っています。そこで、評価は良いか悪いかを判断するのでなく、次の学びにつながる評価をすることを心掛けるようになりました。生徒には、活動の前に評価の観点を伝え、何を目標に行うのか事前に知らせています。例えば、学期に1回行う音読インタビューテストでは、観点を示し、英検の面接を意識したものとしました。評価した内容は生徒に返し、今後取り組むべきポイントが分かるようしています。授業も評価も、学習者の学びを助ける手立てを考えることが大切だと思います。

今後の展望

生徒に合ったscaffoldingを準備して授業に工夫を

「自分のことを語る」から、「社会的なテーマについて自分の考えを持ち発信する」ことは、生徒にとって大きなジャンプです。自分の考えに根拠を持つことも易しいことではありません。生徒に合ったscaffoldingを十分に準備し、授業での工夫を重ねたいと思います。正解を教えるだけではなく、生徒から答えを引き出し、生徒自身に気付くきっかけを与えられる教師でありたいと思います。

わたしのオススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。
今回は、CLASSREPORTで取材に訪れた学校の先生方から、
明日からの授業づくりに役立つCDや書籍をご推薦いただきました。

1 『歌っておぼえるらくらくイングリッシュ① ～アルファベット・数字・将来の夢～』

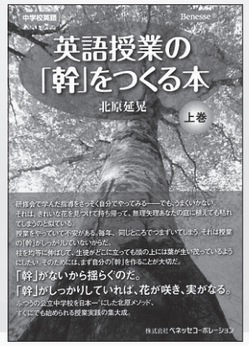
金森 強（監修・指導）
成美堂・教育研究開発室　定価（本体3,800円＋税）
2008年10月刊行

大阪教育大学附属池田小学校
大浦 詩織　先生

こちらのCDには2つのシリーズがあり、シリーズ1には「アルファベット・数字・将来の夢」などを題材にした約30曲の歌が収録されています。それぞれの歌には、歌詞と日本語訳だけでなく、楽しい活動にするためのヒントや補足情報もあります。私も実際に授業で使っていますが、お薦めしたい歌としてOne, Two, Three（1から100）があります。『Hi, friends! 2』で100までの数字を学習したあとに、まずはリスニング練習として、次にジェスチャーを付けて歌いました。その単元が終わっても「また歌いたい」という児童が多く、授業後も口ずさむ児童が多くいました。単元目標に合った歌を活用することで、児童たちは楽しく繰り返し練習し、英語の表現に慣れ親しむことができていたように感じます。授業への動機付けとして、学習内容のさらなる定着を目指した歌の活用として、こちらのCDをお薦めします。

2 『英語授業の「幹」をつくる本』（上巻）

北原 延晃（著）
ベネッセコーポレーション　定価（本体 各2,000円＋税）
2010年3月刊行



和歌山県 和歌山市立城東中学校
須佐 友洋 先生

“授業で勝負できる教師”になりたいが、なかなか授業がうまくいかず悩んでいた時に、先輩教師から薦められ出会った本です。“授業成功の秘訣は「適切な時期に」、「適切な教材を使って」、「適切な方法で」の3つの適切”ということに、なるほどと思いました。内容は4技能の指導や英語の歌など、さまざまな指導方法や授業のノウハウが書かれてあり、また理論やデータに基づいた実践や、すぐにでも始められる実践が数多くあります。英語の授業づくりで悩まれた時、行き詰まった時にきっと参考になる本だと思います。授業にどっしりとした“幹”を。下巻やテスト編、授業映像編もあります。ぜひ読んでみてください。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。
ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.55のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

① 氏名　② 所属（勤務校名）・役職　③ 連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）　④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由　⑥今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切 **2016年12月30日（金）**　応募方法 **03-5439-6879**　**eigojoho@morecolor.com**

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

わたしのオススメ本プレゼント
FAX申込用紙

英検 英語情報編集部宛
03-5439-6879

P.54でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に○をして、下記の必要事項をご記入のうえ、FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに○印をご記入ください。

	1 『歌っておぼえるらくらくイングリッシュ① ～アルファベット・数字・将来の夢～』		2 『英語授業の「幹」をつくる本』（上巻）

氏名	(氏) フリガナ	(名) フリガナ 様
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 □□□-□□□□ 都 道 府 県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1.『英語情報 秋号』で興味深かった記事は何ですか？ 該当するものの番号に○をつけてください。（複数回答可）

1. NEWS & TOPICS
2. 特集「効果的なICTの活用」
3. 特集事例 CLASS REPORT
4. CLASSROOM ENGLISH!!!
5. 英語で授業7つの鉄則
6. 大学入試から変わる日本の英語教育
7. 次期学習指導要領に向けて
8. Information「英検4技能化への対応」
9. EVENT REPORT「第4回全英連研修会開催」
10. Information「TEAP CBT」
11. TEAP Hot News!「東洋大学」
12. カナダ留学の魅力
13. 海外進学「灘中学校・高等学校」
14. SGH「筑波大学附属高等学校」
15. SGU「千葉大学」
16. 思考力・判断力・表現力を育むライティング活動のために
17. プレゼンテーション講座
18. 夢中になれるGame&Activity
19. 全英連山口大会に向けて
20. EVENT REPORT「オーストラリア研修」
21. 2015年度英検英語教員海外研修「帰国後の取り組み」
22. わたしのオススメ本

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。

E161001MCL

Information

Cover Photo :
大阪教育大学附属池田小学校 教諭　大浦 詩織
和歌山市立城東中学校 教諭　須佐 友洋
大阪府立鳳高等学校 教諭　溝畑 保之
千葉大学　副学長・理事（教育・国際担当）　渡邉 誠

編集後記

今号は「言語活動の充実を図るICTの効果的な活用」をテーマに特集を組みました。現在、小・中・高等学校では、児童生徒の言語活動中心の授業を通じて「思考力・判断力・表現力等」を育んでいます。本誌では、各地の小・中・高等学校でICTを効果的に活用した授業を訪ね、児童生徒の学びの様子を取材しました。いずれの学校でも、児童生徒たちは積極的に授業に参加し、自分の考えをパートナーやグループのメンバーと共有し、お互いに学び合っていました。ICTは児童生徒の学びを支えるツールであり、その活用法は多種多様です。児童生徒の学びへの意欲を引き出し、授業を充実させるための効果的な活用法を、皆さんと一緒に考えていくことができたらと存じます。ぜひ、皆さんの授業でのICT活用法を編集部へお寄せください。

『英語情報』編集部一同

英語情報 2016 秋号

2016年10月1日発行

発行　公益財団法人 日本英語検定協会
総務部 広報課
〒162-8055
東京都新宿区横寺町55

編集統括　株式会社モアカラー
アートディレクション・制作　株式会社モアカラー
印刷　日新印刷株式会社
製本　有限会社穴口製本所

◎無断転載、複製を禁じます。
©2016 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題　http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報　http://www.eiken.or.jp/eiken/result/

本誌について

お問い合わせ先 **英検サービスセンター　TEL 03-3266-8311**

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。

http://www.eiken.or.jp/eiken/group

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようにお願いいたします。

● 英検申込受付に関すること（出願、検定料など） ● 英検受験に関すること（受験票、会場、合格通知など）	英検サービスセンター	（個人）03-3266-8311 （団体）03-3266-6581
● 英検 Jr. に関すること	英検サービスセンター	（英検 Jr.）03-3266-6463
● 研究助成に関すること	英語教育研究センター	03-3266-6706
● BULATS に関すること	BULATS 事務局	03-3266-6366
● IELTS に関すること	IELTS 事務局	03-3266-6852
● TEAP に関すること	TEAP 運営事務局	03-3266-6556
● 英検留学に関すること	英検留学情報センター	03-3266-6839
● 通信講座に関すること	通信教育課	03-3266-6521
● その他のお問い合わせ	英検サービスセンター	03-3266-8311

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

2016年度 実用英語技能検定 試験日程

第1回検定

申込受付 3/18(金)～5/20(金) 協会必着
【書店締切 ～5/18(水)】

一次試験（筆記・リスニング） 6/12日
準会場 6/11土・12日
中学・高校のみ 6/10金

二次試験（面接形式のスピーキング） 7/10日

受付終了

第2回検定

申込受付 8/1(月)～9/16(金) 協会必着
【書店締切 ～9/14(水)】

一次試験（筆記・リスニング） 10/9日
準会場 10/8土・9日
中学・高校のみ 10/7金

二次試験（面接形式のスピーキング） 11/6日

受付終了

第3回検定

申込受付 11/29(火)～12/20(火) 協会必着
【書店締切 ：12/16(金)】

一次試験（筆記・リスニング） 2017/1/22日
準会場 すべての団体 1/21土・22日
中学・高校のみ 1/20金

二次試験（面接形式のスピーキング） 2017/2/19日

※4級、5級のスピーキングテストの受験日は申し込んだ回次の二次試験の日から原則1年間です。詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイトをご覧ください。

TEAP利用で、入試が変わる

TEAPを受験して合格に近づこう！

高校2年生 以上対象

受験のチャンスは **年3回**（7月、9月、11月）

複数学科に出願可能
※出願基準点等の条件は各大学にお問い合わせください。

TEAPを利用した入試とは、各大学が実施する英語の試験ではなく、事前にこのアカデミック英語能力判定試験（TEAP）を受験し、各大学で設定しているTEAPの出願基準点をクリアしていれば、本番では英語の試験は受けなくてもよいというものです。

「大学教育レベルにふさわしい英語力」を正確に測定する英語能力判定試験

TEAP Test of English for Academic Purposes

NEWS
「TEAP CBT」開始！
☆上智大学がTEAP CBTの採用を決定☆
TEAP CBT
実施日程：2016年10月16日（日）
申込受付は終了しました。
詳しくはウェブサイトで
http://www.eiken.or.jp/teap/cbt/

2016年度 試験日程・申込期間

第1回 7月24日実施 申込期間 5月16日(月)～6月30日(木)※ 受付終了
第2回 9月25日実施 申込期間 7月19日(火)～9月1日(木)※ 受付終了
第3回 11月20日(日)実施 申込期間 9月12日(月)～10月27日(木)※

※コンビニ・郵便局ATM支払の場合は、上記より約2週間前に申込締切りとなります。ご注意ください。詳しくはTEAPウェブサイトへ。

お問い合わせ
公益財団法人 日本英語検定協会　英検サービスセンター TEAP運営事務局
TEL. 03-3266-6556 ※平日9:30～17:00（土・日・祝日を除く）

詳細・サンプル問題はこちらから
http://www.eiken.or.jp/teap/

英語情報 2016 秋号

2016年10月1日発行　季刊発行　第19巻4号　通巻124号　公益財団法人 日本英語検定協会　〒162-8055　東京都新宿区横寺町55

公益財団法人
日本英語検定協会